中並勤王家列傳

松敲堂發行

谷口政德編

中世諸王家列傳 全

東京 松榖堂藏版

教育勅語謹解

全

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ボシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレバ義

勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スベキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

緒言

曩ニ教育勅語の聖旨を奉體し少年子弟をして忠君愛國の精神を發揮し尚武敵愾の志氣を涵養せんことを目的として日本勤王史傳と題する冊子を刊行したり然るに該書ハ比較的に頁數多きを以て携帶に便ならず宜しく數冊に分本し且つ之れと關係ある肖像圖畫を割愛して各卷首若くは表紙に掲ぐべしと屢〻愛讀諸君より忠告ありしを以て今回更に左の四種に分ちて再刊するに至れり然れども上世より近代に至るまで偉人傑士の史傳あるを以て一あつて他を缺くべからざるハ勿論なり故に全傳を通覽あらんこと編者の本意にして亦書肆の希望なりと云爾

特B
908

上世忠賢傳　日本武尊より源頼朝に至る
中世勤王家列傳　北條時宗より本居宣長に至る
近世人物史傳　松平定信より安積五郎に至る
維新功臣傳　平野國臣より勝安房に至る

明治三十二年二月

編者識

中世勤王家列傳目錄

中世勤王家列傳

目錄

北條時宗　櫻山茲俊　藤原藤房
藤原隆資　菊地武時　菊地武光
護良親王　村上義光　名和長年
結城宗廣　兒島高徳　藤原俊基
藤原資朝　日野邦光　土岐頼兼
藤原師賢　源忠顕　北畠親房
北畠顕家　北畠顕信　結城親光
土居通治　尊良親王　楠正成
楠正行　楠正儀　新田義貞
新田義興　新田義宗　脇屋義助

新井白石

織田信長

豐臣秀吉

毛利元就

德川光圀

中世勤王家列傳目錄

新田義貞　陸奥
織田信長　毛利元就
新井白石　本居宣長

宗良親王　山縣大貳
豐臣秀吉　德川光圀

新井白石

織田信長

島津家久

名和長年

菊地武光

北條時宗

豐臣秀吉

新田義貞

藤原藤房

毛利元就

德川光國

北畠顯家

尊良親王

村上義光

菊地武時

中世勤王家列傳

谷口泉徳編

○北條時宗

北條時宗は時頼の子なり幼名を正壽といひ相摸太郎と稱す年甫めて七歳宗尊親王の府に冠す親王名を時宗と賜ふ幼ゐして射を習ひ夙に才能を以て著はる弘長元年宗尊親王射を極樂寺の第に觀て小笠懸を命ず衆皆な射儀を知らざるを以て辞す時頼時宗を召してこれを命ず時宗騎して場に臨み一發して的に中つ時に年十一宗尊親王歎じて已まず時頼悦びて曰く『この兒固と祖業を繼ぐべき器あり』と是歳左馬權頭に拜し從五位下に叙せら

北條時宗

れ文永二年相摸守に遷る

時宗の執權となるや元國高麗に因りて書を獻じ使を通ぜんことを求む時宗これを朝廷に奏す延議菅原長成に命じて答書を草せしめ時宗に下して議せしむ時宗以爲らく蒙古の書辭無禮あり宜しく報ずべからずと遂に之れを卻く八年高麗使を遣わして元國の來寇を告ぐ既にして元また趙良弼を遣わし書を持して來り朝貢を責む時宗また報ぜず十一年冬元西邊に寇す鎮西の將士拒ぎ戰ひてこれを却く

建治元年元又杜世忠等を遣わして長門の室津に造る時宗命じて之を收へ鎌倉に送らしめ悉くこれを斬る乃ち北條實政を以て筑紫探題となして軍務を節制せしめ鎮西の將士を簡みて邊海を鎮戍し樓りに京都大番を停め國用を省減し民庶を休息して預じめこれが備へをなす明年春將に兵を發して高麗を征せんとし即ち西海及び山陰山陽南海諸道に命じて戰艦を修し器械を備へしむ

既にして元の將夏世周福欒忠をして來らしむ又捕へてこれを博多に斬る弘安四年元大軍を興しその其將范文虎等を遣し舟師を帥ゐて太宰府に寇す時宗宇都宮貞綱をして中國の兵を將としてこれを禦がしむ未だ至らざるに海風暴かに起り元艦漂蕩す我兵之に乘じ擊てこれを殲す時宗その三人を宥し還つてその國に報ぜしむ是より元また我が邊を窺わず寶に時宗の力あり七年時宗卒す年三十四法名は道果寶光寺と号す時宗佛書に通ず嘗て圓覺寺を建て元の無學禪師を延て始祖となす

○櫻山玆俊

櫻山玆俊は四郎と稱す備後の人なり元弘の初め車駕笠置に幸するに及び楠正成義兵を舉ぐ玆俊本國一宮に城きてこれに應ず衆殆んど七百余畧ぼ國中を定め將に隣境を攻めんとす既にして笠置陷ち正成も亦城を焚て僞り死す玆俊の兵皆散す乃ち事の成らざるを知りて吉備津神祠に詣り先づ

藤原藤房

妻子を刺殺し祠を火て自殺す死し從ふもの二十三人あり

初め玆俊深く此の神を敬し常にその宮を新にせんことを祈りて果さず功を立て賞を遂へてその資に給せんと欲す敗死するに及びて悉くその宮社を燒く盡し朝廷の營創されんことを冀ふてあり延元中又櫻山左近將監といへる者あり備前に據りて王事に勤む或いいふ玆俊の一族なりと

○藤原藤房

藤原藤房は初め名は惟房權大納言宣房の長子なり後醍醐天皇に仕へて左大辨に任ぜられ參議を歷て中納言に至り正二位に叙せらる元弘元年北條高時兵を遣はして將に京師を犯さんとす護良親王また人を馳せて變を告げ奉る時に藤房及び弟秀房等數人宿直す天皇召して御評議あり藤房曰く事急あり宜しく疾く宮を出でさせ給ふべし』と即ち車を裝ひて婦人の乘る所の如くし天皇及び神器を載せ陽りて中宮の北山第に如くと稱して陽明

門より出で三條河原に抵る比ひ尊良親王及び公卿數人追ひ至る天皇更に肩輿に御し藤房等皆微服して從ひ奈良に赴き途に笠置に至る賊兵夜行宮を襲ひて火を放つ諸王公卿道に迷ひて相失す唯だ藤房藤原師賢源具行と天皇を扶けて匿伏し夜行き三日にして僅かに有王山に至る賊兵深須三郎松井某天皇を索めて迫り近づく天皇深須に宣へく『汝等何ぞ天恩を戴き以て私榮を期せざる』と深須心に天皇を脫し奉らんとす然れども松井の後に在るを憚りて遂に天皇と及び藤房具行等を擁して去る

既にして天皇六波羅の南方に御す北條高時藤房及び源忠顯を縱ちて侍せしむ二年高時藤房を常陸に流す三年高時誅に伏し藤房京師に反る時に四方已に亂ぐ乃ち藤原實世に敕して賞を論せしむ實世辨別すること能はず尋で藤房に敕してその事を掌らしめたまふ藤房乃ち勤惰を訪察し眞僞を甄別して擬授器ぼ備はる而して內特旨を降して恩賜する所多し藤房諫むべからざるを知り病と稱へて朝せず天皇稍く政事に倦みたまふ驛谷高直

藤原藤房

藤原藤房

千里の馬を獻ず天皇大に悅び天馬と爲したまふ藤房諫めて曰く『臣聞く明主の瑞とする所の人才にあり奇異の物の瑞とする所にあらず昔在周穆八駿に怨して西巡し途に徐戎の亂に死す漢文及び光武の時俱に千里の馬を進むる者あれども二君受けず蓋し天子の出づる鹵簿儀衛自から程式あり千里の馬の平世用ふる所にあらず且つ近日賞罰信あく工役頻りに興り文臣內に諛ひ武臣外に怨む而して姦雄蠭をその間に興ふ天馬の出る焉んぞ亂兆にあらざるを知らん』と帝悅びたまはず後果して藤房の言の如し

是より後藤房屢ば上言すれども聽かれず藤房謂へらく臣たるの道我に於て盡せりと建武元年冬帝に侍して比干夷齊の事を以て諷し奉り曉に至り退き即ち車從を卻け還し北山岩藏に入り僧となる天皇大に驚かせ給ひ宣房に命じてこれを索めしめ將に再び任用し給はんとす宣房人を馳せてこれを召す藤房答ふるに和歌を以てす宣房乃ち親ら馳せて岩藏に至れば藤房既に去れり後その終る所を詳かにせず

○藤原隆資

藤原隆資は左近衛中將隆實の子なり家を四條と稱す隆實早く卒す祖父樞大納言隆顯養ひて子となす樞中納言に任ぜられ檢非違使別當となる元弘の初め北條高時逆を擅ふ後醍醐天皇潛かに宮を出でゝこれを避けたまふ隆資三條河原に追及し大納言藤原師賢に從ひて延曆寺に往く事敗れて笠置に赴く笠置陷るに及び僧と爲りて遁匿し事平ぎて京師に還る詔して髮を落へ本官に復さしめたまふ

延元元年足利尊氏再び闕を犯す隆資從ひて延曆寺に往き兵を將として出でゝ男山に陣す新田義貞等と期を刻し夾みて尊氏を攻めんと約し火を擧ぐるを以て号とおすたまへらく官兵既に京師に入ると乃ち三千余人を率ゐ進で東寺を攻め高師直と戰ひて敗る士卒奮進して火を放ち樓櫓を火く敵兵力め拒ぎ隆資敗れて

藤原隆資

退く而して義貞敗る

天皇尊氏の請に從ひ京師に還幸したまふ隆資紀伊に走り後ち吉野に詣る

天皇崩じ玉ふに及びて藤原實世と幼主を補佐して專ら庶務を決す正平三年楠正行高師直と四條畷に戰ふ隆資兵三千に將として飯盛山に陣しもつて應援を爲す既にして正行戰死し師直進んで行在を襲ふ隆資天皇を奉じてこれを賀名生に避く七年男山に幸するに從ふ官軍利あらず天皇馬に御し夜に乘じて南に皈りたまう敵兵追ふこと急なり隆資返戰してこれに死すその子隆俊またよく王事に勤む

隆俊い大納言隆資の子なり近衛少將に任ぜらる正平中中納言と爲り大納言に任ぜらる八年兵を紀伊に起す熊野八莊司皆あ來り屬す乃ち守護某を攻めてこれを敗り諸將の兵を統べ山名時氏と合して京師を收復す足利義詮後光嚴院を奉じて東に走りしが尋で大に兵を集めて返擊す時氏退て伯耆に皈り隆俊も亦諸軍を率ゐて退く十年亦時氏と義詮を神南に攻め利あらずして退き還る十五年義詮畠山國清と兵を率ひて來り攻む隆俊楠正儀等と之を拒ぎて利あらず走りて阿瀨河城を保つ十六年細川清氏と義詮を攻めてこれに克つ尋て引返る敵兵天野の行宮に迫るに及びて和田義武等と力を戮せてこれを拒ぐ文中二年兵を率ひて夜敵營を襲ひ克たずして戰死す隆俊勤王して勤勞あり常に恢復を以て意と爲す嘗て歌を詠じて曰く「君が爲め吾が取來つる梓弓元の都へ返さゝらめや」また以てその志を見るべし

菊地武時

菊地武時は二郎と稱し肥後の人なりその先は中納言藤原隆家より出づ父を隆盛といふ元弘三年後醍醐天皇船上山に幸したまふ武時少貳貞經大友貞宗と勤王を謀り密かにこれを行在に奏聞せしかば天皇嘉奬ありて錦旗を賜ひ以てその義を勵ましたまへり

菊地武時

鎮西探題北條英時博多ニ在りその謀を聞て武時を召す武時事の洩るを慮ル乃ち少貳貞經大友貞宗ニ告げて兵を出し力を戮せんことを以てす貞宗形勢を觀望して答へず貞經も亦官軍屢〻京師ニ敗るゝと聞き疑懼して安んぜず遂ニ武時の使者を斬り首を英時ニ送りたり武時大いニ悔ひ怒りて曰く『恨く〻竪子の爲めニ過らるゝことを吾今兵を出す豈ニ手を汝輩に假らんや』と即ち家兵百五十を率ひて先づ櫛田の祠を過ぐるころ馬躓りて進まず武時罵りて曰く『我天子の御爲ニ戰ニ赴く神何ぞ騎して過ぐるを咎むるを得んや』て雙の鏑矢を取りて祠の扉を連射す是ニ於て馬行くこと初の如し後或人巨蛇の矢ニ中りて死せしを見たりといふ

武時進んで北條英時を攻む兵皆死を輕んじてその鋒甚だ銳し時窘迫して將ニ自殺せんとすたゞ〻小武貞經、大友貞宗數千の兵を率て來り援ふ武時その克つべからざるを度り兵五十を分ちて長子武重ニ附し誡めて曰く『我今義ニ赴きて命を授く固よりその分あり汝急ニ國に歸り城を完たふし兵を聚めて乃父の讎を報ずべし』と武重固く俱ニ死ぬんと請ふ武時許さず武重止むを得ず涙を揮て去る

武時遂ニ餘兵を督し陣を冒して歿す時に年四十二死ニ臨み歌を作りて別を妻ニ告ぐその歌ニ

故郷の今宵ばかりの命ぞと知りてや人の我を待つらん

天皇京師ニ還御ありて勤王諸臣の功を錄したまふ楠正成奏して曰く『武時の如きい勅ニ應じて命を致す者宜しく功臣第一とおすべし』と天皇これを領ぜ給へり

武時の長子武重肥後守ニ任ぜられ後左京大夫とある元弘三年武時義兵を擧げて北條英時を博多ニ攻め武重ニ命じて軍中より還りて再擧を計らしむ幾くもなく小貳貞經兵を起して英時を討ち使を遣はして來り告げしむ武重謂へらく『彼れ初め父と勤王を謀り後ち約ニ背て我が父を伐つ我今以てこれに報ゆべし』と遂ニその使を斬る

菊地武時

菊地武時

建武中足利直義と箱根に戰ふ尊氏闕を犯すに及び武重義貞に從ひて大渡に禦せぎしが利あらず遂に車懸を護して延暦寺に至る後ち脇屋義助に從がひて舟坂山を攻めて功あり天皇尊氏の爲に給むかれて京師に還りたまひしとき武重も亦拘囚せらる守者の弛みを伺ひ馳せて遁れ還り兵を集めて勤王す延元二年一色範氏來りて肥後を侵す武重阿蘇大宮司宇治惟澄と逆へてこれを大塚原に破り尋て賊を合志城に圍みて屢〻これに克つといふ

武時の二子を武敏といふ掃部助たり元弘中兵を本國に起して遙かに官軍を應す足利尊氏の西走するや少貳貞經の子頼尚を遣はし衆を師ひてこれを迎へしむ武敏偵ひてこれを知り兵三千を發して水木渡に要す頼尚既に渡る乃ち聚ちてその後軍を塞ぐす貞經留りて太宰府に據る府中兵寡あり武敏將に貞經を襲はんとす貞經出でゝ筑後に陣す武敏接戰してこれを破り進みて太宰府を攻め悉くその器械を焚く貞經退きて内山を保つ武敏これを圍むこと數日たまゝ貞經の族人阪順せんと欲するものあり貞經に迫りて自殺せしむ

武敏勝に乘じて尊氏を筑前に攻む尊氏弟直義と逆へて多々良濱に戰ふ武敏敗れて退く尋て敵將一色範氏仁木義長來り攻む武敏支ふること能はず僅かに山に匿れて免る尊氏進でまた兵を興すに及びて今川藏人と唐川豊福寺等の諸處に戰へり

菊地武光

菊地武光は武時の第八子なり初め豊田十郎と稱す長兄武重の子武士早く家務を辞するを以て武光職を襲で肥後守に任ぜらる父兄の訓に遵つて心を皇室に竭す

初め後醍醐天皇懐良親王に命じて征西大將軍となし出で筑紫を鎮せしむ興國中武光親王を肥後に迎へてこれを奉じ大友氏時少貳頼尚と連歳兵を

攝へて屈べこれを克ちたり正平十二年一色直氏及弟範光を筑前に擊ちてこれを走らし聲勢大に振ふ頼尚氏時諸豪族風を望みて從屬す足利義詮直氏等の敗るゝを聞き大に懼れ更にその將細川繁氏を遣わし兵を率て來り攻めしむ病ひで道に死す頼尚氏時武光の爲めに指揮せらるゝを慚ぢ潛かに繁氏に應ぜんと圖りしがその死を聞て寢ひたま〳〵武光兵五千を將として島山國久を日向の六笠城に擊つ氏時遂に高崎城に據りて畔く宇都宮宏知肥田正員これに應ず武光氏時のよく爲すあきを以て先づ往きて國久の子重隆を三股城に攻めてこれを克つ國久懼れて六笠城を弃て重隆と俱に遁る武光乃ち師を旋へす氏時等その鋒の鋭きを見て畏縮して出でず武光頼尚及び阿蘇大宮司宇治惟時と兵を合せて氏時を討たんと欲す而して二人も亦異志あるを知らず親ら五千人を以て先づ高崎城に趨く頼尚道に兵を集めて大宰府に據る時に惟時九槃を結ぶと聞き乃ち軍を還して惟時を擊ち悉くその九槃を破り首を斬ること三百余級惟時僅かに身を以て免

かる

明年懐良親王を奉じ兵八千余騎を提げて少貳頼尚を討つ頼尚六万を率ゐて戰いんとし筑後川を隔てゝ陣す武光手下の兵五千を督し先づ渡りてこれに薄る頼尚戰いずして退くこと里許大原に壁す武光追ひ至る敵已に徑路を塞斷して前に泥澤あり輙く進むべからず

初め、頼尚古浦城に在りて一色直氏の爲めに攻めらるゝや武光赴き援いて免るゝことを得たり頼尚これを德おりとし血書を作り誓て曰く『子孫世菊地氏に畔くなかれ』と是に於て武光その誓文を取り旗竿に掲げて頼尚を辱しむ相持して日を踰ゆ武光夜る武政等精兵七千人を分遣して三隊と爲し筑後川に沿ひ水聲に乘じて進ましむ又壯士三百人を簡み夜間道に繰りて敵背を掩ひ吶喊して亂射せしむ敵衆驚駭して隊伍大に擾れ自から鬨擊して死する者相枕す天明く武政兵一千に將として先發して頼尚の子忠資及びその禰將三人を斬る延武信等殿て進み殊死して戰ふ首を獲ること七百

菊地武光

余級我軍死する者三百余人懐良親王及び武光兵三千を將とし大を呼つて直に敵の中堅を擣く飛矢雨の如く親王身に三創を被りその他戰歿する者頗る多し武光武政聲を勵まして衆を督し身將士に先ちて奮戰す敵武光を識りて矢を射ること雨の如し馬傷きて斃く乃ちこれを易へて縱横突進す凡そ十七合着くる所の冑斫られて地に墜ち頭兩及び中る馬又傷いて危急あり一敵將ありこれを遮り馬上に相搏ち俱に落つ武光遂にその首を斬りその馬に上り冑を蒙りてまた進む卯より酉に至りて斬獲三千余頼尙大に敗走す

十六年又新田の族と懐良親王を奉じ兵五千余を師ひて博多に軍す少弐頼尙及び大友氏時等二万五千人を率ひて來り拒ぐ武光の族越前守松浦黨を擊ちてこれを走らす明日武光親王と香椎を攻む頼尙氏時等松浦黨敗るゝと聞き大に懼れ壁を空ふして遁走す

明年足利義詮斯波氏經を以て九州探題となし豊後に至る武光弟武義等を遣してこれを攻めしむ氏經子松王丸等をして長原に逆へ戰ふ武義敗走す越前守奮戰して大にこれを破る敵乃ち敗走す武光繼て至り武義と兵を合せて豊後に追ひ至る氏經氏時退て高崎城を保つ相持すること三歳十九年長門守護駿河守某來り武光に降る是より先き駿河守事を以て大内弘世を怨む是に至りて兵を假りて弘世を討んと請ふ弘世兵三千を率ひて豊後に至る武光駿河守と擊ちてこれを破る二子あり武政良政といふ武政また勤王して屢〻足利氏と戰へり

護良親王

護良親王は後醍醐天皇の第三子なり天資穎敏幼よして天皇の恩寵異を被り兵部卿に拜せられ山門の坐主となり尊雲と号し大塔に居る時人因て大塔宮と稱す天皇北條高時の權を專らにするを惡くみたまひ毎にこれを除かんと思召し親王とこれを討滅せんと謀らせたまひしが事泄る高時大ひ

護良親王

を恐れ乃ち廢立を行はんと圖り元弘元年秋二將を遣はす親王先づ諜して
これを知り天皇をして笠置に遁し奉り自ら弟宗良と共に將として賊を邀
へ擊てこれを破る既にして兵潰へ宗良と路を分ちて走り南都の般若寺に
匿る笠置既に陷り宗良擒にせらる賊兵を遣はし般若寺を圍む親王爲す所
を知らず將に刀を引て死に就かんとす傍に三函あり大般若經を盛るその
一は經を出すこと半に過ぐ乃ち跳りて函中に入り經を以て自ら覆ひ刀を
心に擬して伏す賊兵遍く佛殿を索め遂に經函に及ぶ而して親王が匿るゝ
所の函は蓋の開けたるを以て怪しまずして去る親王謂へらく『彼れ一たび
索めて得ず後必らずまた來り索めん』と急に移りて別函に匿る賊兵果して
還り獨の匿るゝものを目して曰く『前にこれを索ることを忘れたり』と函を
傾けて經を出し得ずして去る親王遂に免れ從士尤人と裝ひて修驗者とな
り熊野に赴き十津川に至る土豪戸野兵衛といふ者勤王の志あり親王等こ
れを投ず兵衛乃ち新館を造りて親王を奉じ柵を各所の要害に設けて守備

の計をなす親王髮を落へて兵衛の族女を娶る賊これを聞き勝を路傍に揭
げ親王等を獲るものは僧ふに重賞を以てす親王等逃れて吉野に入る
明年五月兵を吉野に起し寺に據りて城と爲し又從士赤松則祐を遣りてそ
の父則村に諭し兵を播磨に起さしむ已にして賊將二階堂貞藤大兵を將と
して來り攻む親王眉尖刀を執り左右二十餘人を率ゐ縱橫奮擊して敵を却
く親王甲に七矢を著け頰腕及び中り流血淋漓たり村上義光外城已に陷る
を以て親王に勸め間道より脫れ去らしむ道又敵の遮ぎる所となり辛ふと
て免るゝを得たり
已にして貞藤親王の高野山に在ると聞き兵を縱ちて大に山中を搜索す然
れども僧徒親王を匿せしかゞ得る能はずして去る尋て新田義貞間使を發
し令旨を奉じて勤王せんと請ふ親王乃ちこれを與ふ幾くあらずして天皇
船上に幸したまひ官軍大に振ふ親王河內の志貴山に住し赤松則村の兵京
師を攻めて利あらずと聞き更に令を延曆寺の僧徒に下して則村を助けし

護良親王

ひたすら義貞高時を誅し足利尊氏等京師を收復せしかば車駕還幸あらんとせり而して四方の兵士尚ほ志貴山に雲集す親王これを率ひて入朝せんとす而して往くを果さず天皇參議藤原忠清をして就て言はしめて宜く『天下既に定まる汝將に誰を討んとす盍ぞ髮を削り舊に復せざるや』親王答へて曰く『高時誅に伏すと雖も余黨未だ殲さず兵備未だ遽かに弛むべからず且つ陛下の德と愚臣の謀を以て今日あるを致す而るに足利尊氏擅に己が功と爲す彼その志を觀るに測るべからざるものあり、その力の緩なるに及でこれを除かざればまた一の高時を生ずるあり臣聞く佛に二道有り攝受といひ折伏といふ願くば陛下臣に任ずるに戎事を以てせよ臣將に陛下の爲に折伏せんと天皇懌びたまはず然れども親王の功多きを以て勉めてこれに從ひ拜して征夷大將軍と爲す而して尊氏を誅することを許されず尊氏その己に利あらざるを知り天皇の寵姫藤原氏と結び經ゆるに謀反を以てし因てその兵を徵す書を上り藤原氏をして傍らよりこれを証せし

む天皇怒りたまひ建武元年冬中殿の和歌會に托して親王を召し武士をしてこれを執へしめ宮中に囚す親王憤怒し識る所の宮人に因り上書して冤を訴ふ書入る有司中外を憚りて屏けて奏せず遂に留して親王を鎌倉に送りたまふ

尊氏の弟直義兵を遣はして親王を護送し土牢を二階堂に鑿りてこれを幽す二年秋北條時行兵を興して鎌倉を攻む直義出奔す時に淵邊義博に謂て曰く『親王は吾家の深讎なり汝往きてこれを圖れ』と義博乃ち土牢に至る中暗黑なり親王方に燭を照らして佛經を讀む義博の至るを見瞿然奮起して曰く汝我を殺さんと欲する乎と進みてその刃を奪ふ義博乃ち副刀を拔てその膝を斫りてこれを踣し將にその喉を斷んとす親王頭を縮めて刃を嚙み鋒を折ること寸許義博首を提げて還り將に直義に示さんとすその面を視るに生けるが如し猶ほ鋒刀を含む乃ち異として弄て去る侍女屍を收めてこれを火し骨を獅して京師に還る天下聞てこれを冤とす或ひ曰ふ義博

村上義光

賞又親王を弑せず窃かに親王を率ゐて遁れ匿るゝ

村上義光

村上義光は達四郎と稱す信濃の人陸奥守源頼清の後彌四郎信泰の子なり左馬權頭とある元弘の亂に義光子義隆及び赤松則祐平賀三郎等と護良親王に從ひ十津川に逃る熊野別當定遍これを索ること急なり護良去りて吉野山に往く土人芋瀬莊司といふ者兵を以て路に要す護良計の出る所なし從者を遣はして說くに投託の意を以てす莊司曰く『定遍官軍の黨與を究求し名を錄して鎌倉に報ず臣今は大王を納れんとするも能はず然れども前行を遏るも敢てせざる所あり請ふ錦旗若くは近臣一兩人を留めて辭とすることを得んと則祐曰く危を見て命を授くるは士の職なり臣請ふ留り死せん平賀三郎曰く從行の士皆大王の股肱なりと雖も失ふべからず宜しく旗を以て脫けらるべしと護良これに從ひて過ぐることを得たり

義光たまゝ後る莊司衆を擁し錦旗を荷ひて還るに遇ふ義光直ちに前みて旗を奪ふ莊司慚憤す義光顧みずして去る護良大に喜び吉野に至り城を築きてこれを守る敵大兵を以て來り攻め外城既に陷る親王親ら戰ふこと數合退て左右と酒を酌みて慨歌す義光鎧に矢を被むること蝟毛の如し來り眺て曰く『臣中城を拒ぐこと數時たゝ歌聲を聞く故に來り會す賊勢强きこと甚だし城支ふべからず臣請ふ大王の鎧裝を賜り詭りて大王と為りて死せん大王間に乘じて遁れ去りたまへ』護良曰く『死せば俱に死せん何ぞ相弃るに忍びん』と義光聲を勵まして曰く『大事を圖るもの惡んぞ此の言をおしたまふ』と起ちて自ら護良の鎧を解く護良顧みて曰く『卿の忠は生を易へるも忘れず我もし免るゝことを得ば厚く冥福を修せん免れざれば追て地下に從いんと』遂に行く

義光乃ち護良の鎧を被りて譙樓に登る子義隆來りて偕に死せんと欲す義光曰く『亟かに去りて王の爲めに後拒し徒らに死する勿れ』と義隆泣て訣る

村上義光

義光遙かに誰良の去遠きを望み大に敵軍に呼つて曰く『今上の第三子誰良引決す汝等行々天誅を受けん我が自刃するを見て法とせよ』と乃ち腹を割き腸を抽きて壁に擲ちて斃る賊四集し就てその首を斬りて解き去れり既にして吉野執行岩菊丸兵數百を將として誰良に追及す義隆單身留り鬪ひて數人を斬り身に四十余創を被ひり腹を屠りて死す誰良因て免ることを得たり義隆時に年十八

名和長年

名和長年姓は源氏初の名は長高又太郎と稱す伯耆名和の人なりその父を行高といふ長年名和の地頭たり人となり勇健にして能く射る資產富饒にして宗族强盛なり國人の爲めに畏服せらる元弘三年後醍醐天皇隱岐に在り衛士に忠款を効す者あり天皇『因て近國に誰か大事を託すべき者ぞ』と問はせたまふ皆な長年を以て對へ奉る長年の弟行氏亦た衛中に在り天皇乃

ち召見し還りて長年を論して奉迎せしむ行氏風に遭ひて發することを能はず天皇先づ源忠顯と海に航して伯耆に至り成田小三郎を遣し長年の家に至り旨を傳へしめて宣ふ『朕隱岐より至り將に卿に依賴せんとす卿若し詔を奉ぜざれば速かに給倉に報ぜよ』と長年流涕して曰く『天子託するに大事を以てしたまふ何ぞ敢てこれを辭せん臣必らず死を以て報い奉らん』と乃ち子弟を聚めてこれに告ぐ子弟皆奮つて曰く『吾輩の勇は隣國の知る所なり賊たとひ鉄盾を被りて來り攻むるとも吾能く射てこれを凋さん』と長年乃ち衆を率ゐて奉迎し天皇を扶けて馬に上し奉り船上山に赴かんとす天皇疲れたまふこと甚だし明日を以て船上に幸せんと宣ふ長年進みて曰く『この地賊境に密接す今速かに進ませざれば臣等將に賊騎の爲に蹂躪せられん陛下も亦自ら奮ひたまはざれば何を以てか海內を蕩平し給ふべけんや』と天皇乃ち進みて山麓に至りたまふ衆木を縛りて御輿と爲し西坂より登る俄かにして衆あり後より至る天皇驚きて賊と爲したまふ乃ち長年の

名和長年

弟僧源盛及び大山寺の僧徒ありし遂ゑ山上の佛寺ゑ御す

長年邑民を募るゑ『能く我倉穀を船上ゑ運ぶ者ゑゐ人ごとゑ錢五百を給せん』と即日ゑ五千餘石を致せり乃ちその家を火き百五十人を以て船上を守り木を伐りて楽と爲し屋材を撤して栖ゑ代ふ弟氏高松煙を以て布を織べ近國將士の旗号を偽して疑兵を張る翌日佐々木清高佐々木昌綱と兵三千を以て來り攻む旗号を望み見て敢て進まず長年兵の寡きを以て合して出樹陰ゑ伏し數ゞ射手を出して矢を發し以て日の暮るゝを待たしむ一も命中せざるあく中れゞ必らず甲を洞く昌綱矢ゑ中りて死す佐渡判司山後ゑ陣し兵八百を以て來り降る清高これを知らず衆を麾て競ひ進ましむ長年射て四人を斃すたま〳〵日昏く雷雨驟かゑ至る衆これゑ乘じて突擊す賊兵崩潰して死する者谷を塡む清高僅かゑ身を以て免る

是ゑ於て近國の將士數万風を望みて來集す遂ゑ源忠顯及び長年の子義高を遣わして京師を収復せしむ天皇長年を召して宣わく『願ふゑ長くして吾き者い危からん』(長年初の名長高)と乃ち今の名を賜ひ從四位下ゑ叙し左衛門尉兼伯耆守ゑ任ぜらる天皇又長年ゑ宣わく『朕の隱岐を出づる舟おくんゞ何を以てか海を濟らん卿それ舟を以て徽号と爲せ』と乃ち親ら帆舟を畫きたまひてこれゑ賜ふ

既にして京師の捷報至る天皇即ち闕に還御おしたまいんと思召しこれを群臣ゑ詢りたまふ藤原光守これを非とし長年も亦これを止む天皇親らこれを筮したまひ意を決して行を治め長年をして劒を帶び侍衛せしむ建武元年功を以て因幡伯耆の守護と爲り尋て記錄所寄人とある新田義貞の東征するとき長年楠正成等と留りて京師を衛る

延元元年足利尊氏京師を犯す長年二千余人を以て勢多橋を扼す諸軍破れ車駕延暦寺ゑ幸すると聞き乃ち兵三百を以て京師ゑ還る賊帆舟の徽號を認めて遮ぎり擊つ長年轉戰すること數十合死する者半ばゑ過ぐ遂ゑ禁門ゑ遣るゑ宮闕人おきを見て回顧流涕し遂ゑ行きて行在ゑ詣り諸將と力を

名和長年

結城宗廣

戮せて尊氏を擁てこれを走らし翻を護して旋る尊氏再び至るに及びて翻に從て延暦寺に往く尊氏の兵東坂を犯す長年脇屋義助等と擊ちてこれを卻け又新田義貞と尊氏を京師に攻む白鳥を過ぐる比ひに路人相語りて曰く『三木一草僅かに一木を存す』と長年聞きて謂へらく輿論我が死の晚きを嘲けるあり戰もし利あらざれば今日死んと盞し結城伯耆楠千種は當時の功臣にして並びに恩眷を承く故に世稱して三木一草と爲すといふ戰敗るに及びて諸將引還る長年後門を閉ぢて走路を絕ち從弟信貞等及び二百人と力鬪して死す

結城宗廣

結城宗廣姓は藤原父を祐廣といふ陸奥白川に居る因て白河結城と稱す宗廣上野介となり薙髮して道忠と號す北條高時僧圓觀を執らへてこれを宗廣に附しその邑に禁錮せしむ幾くもなく宗廣また關東の軍に從て笠置に

往く元弘三年後醍醐天皇船上に幸したまひ四方勤王の者多し時に宗廣鎌倉に在り子親光京師に從軍す護良親王の令旨に應じて皈順し令旨傳へて鎌倉に至る宗廣即ち弟片見祐義田島廣業等と兵を擧げて新田義貞に應じ俱に鎌倉を攻めてこれに克つ

車駕京師に還るに及びて宗廣圓觀等を以て闕に詣る詔して食邑い舊の如くし追加して陸奥の宇多莊を賜ふ乃ち鎭守府將軍源顯家と俱に成良親王に從ひ入り援けて國城寺を攻め屢ば京師に戰ひて遂に尊氏を破る既にして諸國また叛す宗廣顯家に從ひて東還して鎭撫す

延元二年國內兵起る顯家に從ひ靈山城を保つ天皇書を賜ひてその老年に對して事に從ふを賞したまふ尋て再び顯家に從ひて鎌倉を攻め奈良に抵る宗廣顯家に謂て曰く『當に直ちに京師を襲ひて兇徒を一掃すべし濟らざれば屍を王城に暴さんのみ』と顯家これを然りとし未だ發せざるに敵將桃井直信等來り攻む顯家戰歿し宗廣い吉野に奔る

結城宗廣

この時ゑ方りて新田義貞北國ゑ戰死し源顯信男山を弄て走り朝廷震慄して爲す所を知らず宗廣奏して曰く『顯家三年の間ゑ再び大衆を發して入りて拔ひしい陸奥出羽の固く威令ゑ服して一人の後を圖るあきを以てあり謂ふ今ま民心の未だ綏ぜざるゑ及んで一皇子を遣わし号を建て令を明かゑし逆を懲らし順を奬めゞ略定の功何ぞ濟らざるを患へん』云々と朝議これを可とし敕して又義良親王を奉じ源親房及び顯信と共ゑ陸奥ゑ適かしむ諸軍敵の陸地を梗がんことを度りて悉く伊勢ゑ會して舟を大湊ゑ發し天龍灘ゑ至るたま〳〵颶風起りて船艦四散す宗廣の船漂ふこと七日ゑして安濃津ゑ抵り風を候ふこと十余日病ゑ嬰りて死ゑ瀕せんとす僧あり來り問ふて曰く『死迫れり唯佛名を唱へんのみ他あるあし若し遺囑する所あらゞこれを貴息ゑ傳へん』と宗廣目を瞑せんとして之れを聞き瞋起して笑つて曰く『我生れて七十百事完足すまた遺念あし但だ賊を滅ぼすを得ずして死ゑ就かゞ多く憤劫を生ぜんこれを恨みとあす我言を以て賢子親朝ゑ

傳へて謂へ供養施僧を以て爲すこと勿れ稱名讀經を以て爲すこと勿れ速かゑ賊首を斬りて墓前ゑ獻げよ』と言ひ訖りて刀を拔き逆しまゑしまた持ちて切齒して死す

兒島高德

兒島高德は備前の人あり備後三郎と稱す父を範長といひ和田備後守と稱す高德夙ゑ讀書を好ひ後醍醐天皇笠置ゑ在すとき兵を聚めて勤王せんことを謀るたま〳〵行在守を失ひ車馬西ゑ遷る高德乃ち宗族を聚めて謂て曰く『志士仁人は身を殺して仁を成すと我れ恥を途ゑ奉ひ奉りて義を舉げんと欲す儻し事濟らずして死するも亦以て名を輝すゑ足らん』と衆奮て是ゑ從ひ舟坂山ゑ上りてこれを待つ護送の兵轉じて山陰道ゑ出づると聞き乃ちまた間道より杉坂ゑ至れゞ車駕已ゑ過ぐ衆是ゑ於て散じ去る高德天皇ゑ見ゆることを得てその衷情を道はんことを願ひ獨り微服して

兒島高德

怒を尾すること數日而して間を得ず乃ち夜御館に入り櫻樹を斫りこれを書して曰く

天莫レ空二勾踐一　時非無二范蠡一

明日衛士これを見れども讀むこと能はず乃ちこれを天皇に白す天皇何人の爲す所たるを知りたまはず然れども御心に勤王の者あるを知りて竊かに自ら喜びたまふ天皇の船坂に在ますに及び高德範長とその族を率ひて留り途に源忠顯に屬して六波羅を攻ひ官軍敗績し忠顯走りて峯堂に皈る高德及び村上行村力戰して愈々勵む忠顯人を馳せて高德を召還さしむ高德曰く勝敗運に在り小衆何ぞ患へん但だ賊我が疲るゝに乘じて來り襲はんも未だ知るべからず我請ふ往て七條橋を扼せん公また兵を出してこれに備へよと遂に三百人を率て橋西に屯す夜半高德望みて峯堂の炬火の漸々少きを見て意へらく忠顯陣を棄てゝ遁るゝと乃ち將に往てこれを撿せんとす道に荻野朝忠に遇ふ朝忠曰く大將既に遁るゝと高德曰く我とこの儒將

に從つて事を作す誤れりと是に於て兵を山下に留め獨り峯堂に登れば錦旗器械委棄して狼藉たり高德大に罵つて曰く何ぞ此の如き人をして抗衡に墮死せしめざるべけんと乃ち錦旗を收め往きて朝忠と高山寺城を守る

足利尊氏兵を篠原に舉ぐるに及び近郡の將士爭ひ附く高德その下に屬するを惡み特に朝忠と轉じて若狹より入りて諸將と六波羅を攻めてこれを克ち備前に還る建武二年他浦信胤等福山城に據りて叛將尊氏に應ず高德是を攻め難んで克つたまへ軍中に叛する者あり戰敗れ還りて三石城に據る官兵稍々集りしかれども出て和氣驛に戰ふ松田盛朝敵に降り高德敗走して熊山城に入る即夜また叛く者あり敵を導て城に入らしむ高德宗族と僅かに免れ事を以て上に報じ途に山中に匿る

延元元年新田義貞脇屋義助をして舟坂を攻めしむ久ふして下らず高德これを聞て人を遣はし義貞に告げしめて曰く『舟坂の險固より下し易からず我當に四月十八日を以て兵を熊山に揚ぐべし敵必らず衆を分て來り攻め

兒島高德

ん將軍乃ち軍を分て二とおし一は攻むる爲ねし一は三石の南より進ませしその不意より出でゝ前後より夾み擊んし舟坂舉ぐれば西國何ぞ附せざるを患へんと義貞大に悅び約して兵を進む

斯て至りて高德その宅を火き二百余人を以て天明に熊山に上る敵果して三千人を出して來り攻む高德十余騎を以てこれに當る重傷して馬より落つ二騎卒あり馳せ來りてこれを斫る高德の從士和田範氏松崎範家赴き救ひ扶け載せて皈る創甚しく幾んど死おんとす父範長これを激して曰く在昔鎌倉景政は敵の爲めに射られてその目に中れる矢を拔かざること三日遂に射て己を傷く者を殺すと汝今小傷にして乃ち委頽することは是の如し何ぞ大事を濟すを得ん』高德乃ち蘇息し言つて曰く『速かに馬に扶け上せよ出で戰へんと範長乃ち余兵十七騎とこれを助けて突進す敵戰へずして退く宮軍の舟坂を拔くを得たるは此の戰に賴りており

尋て範長高德と他浦信胤の兵の尊氏に從ひて東上するを拒がんと欲し出て西川尻に陣す敵福山城を陷ると聞き義助と會せんと欲す義時既に退きしかば夜に乘じて險を踰へ佐古浦に至らんとす高德の創ます〳〵劇し範長これを識る所の僧に託して行く天既に曙く赤松則村の兵を出して險隘を要するに遮ん呼びて言ふ亡卒速かに甲を釋いて降るべしと範長笑て曰く『前に足利尊氏百方書を以て我を誘ふ皆おの壞裂して火に投ず今ま豈に汝が輩に降らんやと乃ち八十三人を以て圍を破て東出す敵村落に傳呼して亡卒過ぐると報ぜしかば民兵數十人回集してこれを射る範長行々戰ふて十八合士卒死傷して止だ六人を存するのみ範長曰く『我に代て族を舉げて來らしめば當に蹂躪して過ぐべきに今事此に至るこれ我が死するの日なりと遂に腹を割き刀を銜みて死す

高德尊氏を京師に攻めて男山を拔かんとす高德從て軍中にあり議して曰く『先づ檄狀を叡山に送りてその向背を覘ひ然

兒島高德

る後發せん』と義貞これを從ふ延暦寺も亦報狀してこれを應ず居ること因くして脇屋義助を從て伊豫を如く義助病みて沒するを及び逃れて備前を阪る

興國六年脇屋義治を上野を招て兵を起す蹶起し遂を義治を擁して海路竊かを京師を入り義故を招て千人を得たり高德謂らく衆をして聚り居らしめば必らず敵の爲めを發かれんと乃ち近郊を分ち置き夜尊氏を襲いんと期す期を先つ一日尊氏諜して在る者を攻めしむ衆屋を上り雨の如く射る矢盡きて自殺す余衆これを聞いて散じ去る高德亦義治と信濃を走り後剃髮して志純と号す

正平七年天皇將を男山を御し京師を收復せんと圖りたまひ高德を召し援兵を募らしむ高德暇かを東北を赴き諸將を諭して曰く『今行在危急あり援兵至らず万一乘輿賊を殁せば天下の事爲すべからず宜しく速かをこれを援ふべし』と是を於て新田義宗及び小山四郎宇都宮公綱桃井直常上杉憲顯

吉良貞滿石塔義房等兵を發して來り援ふ未だ至らずして男山陷る高德後ち終る所を知らず或い曰く上野國邑樂郡古梅樹村高德寺をその墓ありと

藤原俊基

藤原俊基い大學頭種範の子あり元亨三年蹴人頭を累補す家世儒を業とし才學優長あるを以て特を寵眷を得中納言藤原資朝と共を興復の謀ごとを參すその要劇暇あらざるを以て每ねを屏居を得て大事を營畫せんことを思ふ遂に曆延寺の訴狀を誤讀するを託し疾と稱して朝せざること半歲筑かを裝ふて修驗者とおり畿內關東海西を遊歷し要害風俗觀察せざるはなし

資朝また事を托して宴遊し俊基と贅畫し且つ僧玄慧をして書を講せしむ既をして事泄れ北條高時執へて俊基及び資朝を致す明年これを釋し仮す元弘元年右中辨を累進す僧文觀等鎌倉を赴へられ具さを朝廷の謀ごとを

藤原俊基

告ぐるに及んで北條高時又人をして俊基を收らへしめ鎌倉に致す俊基自ら免がれざるを知り菊川に至り驛舍の柱に題して曰く『いにしへもかゝるためしをきくがいのおあじおがれにみをやしづめむ』と承久の時中納言宗行此の地に於て北條氏の爲に害せらる故に然か云ふ

明年帝西幸するに及んで葛原岡に殺さる死に臨み偈を作つて曰く「古來一句無死無生万里雲尽長紅水清」とたゞ〳〵その臣後藤助光俊基の妻の書を獄し京師より刑處に至る流涕訣別しその屍を火き骨を高野山に葬ひる

藤原資朝

藤原資朝は櫛中納言俊光の子なり家を日野と号す才學人に過ぐ元享元年參議に累任し三年從三位に叙し檢非違使別當となる敕を奉じて鎌倉に使ひし還つて櫛中納言となる帝密かに興復を圖り資朝及び藏人頭藤原俊基を以て謀主となす資朝嘗て裝ふて修驗者となり東國に潛行し以て兵士を結ぶ美濃の人土岐頼貞多治見國長勇名あり資朝翫繰して見るを得るたゞたま頼貞國長京師に番直す資朝引て同謀となさんと欲す而して聽かざるときは事泄れんことを慮り乃ち俊基及び大納言藤原師賢中納言藤原隆資左衛門督藤原實世僧游雅玄基武人足助重範等としば〳〵頼貞國長を延き深く相交驩し會聚する毎に皆露髻散髮坐に位次なく婦女二十人をして酒を行らしめ名けて無禮講といふ宴酣なるとき終に計ごとを以てこれに告ぐ頼貞心を傾けて相謀る又外議を恐れ僧玄惠を召し唐の韓愈の集を說か

藤原資朝

しむ赴潮州詩を至り来成を曰く『是れ不詳の言あり當今但だ當さに孫與を謂ずべきのみ』と遂にこれを罷む

既にして事洩る北條高時人をして資朝及び俊基を収らへ鎌倉に至らしめ侍所に属し尋て資朝を佐渡に流す居ること七年高時帝を隠岐に遷すに及んで佐渡の守護本間山城入道をして資朝を殺さしむ資朝嘗て佛を學び禪に参す自から和翁と稱す

初め權大納言藤原爲兼北條を滅さんと謀るを以て高時の執ふる所となり佐渡に遷さる資朝これに一條に過ふ目送し嘆じて曰く『大丈夫世に處する斯の如きを得べ足れり』と羨嗟すること久しその生平の志操率ね此の類あり

日野邦光

日野邦光姓は藤原幼字は阿若權中納言資朝の子なり元享三年北條高時資

朝を佐渡に流し本間山城入道をして之れを殺さしむ邦光年市じめて十三母に從ひて仁和寺の側に匿る父の死期近きに在りと聞き佐渡に適き相見て訣別せんと欲す母泣いて之れを止む邦光陽に諾して密かに家僕と往かんことを謀る母已を得ずして之れを遣る其の年の五月邦光遂に家僕と徒歩すること十余日商船に乘りて佐渡に到り本間の居所に詣りて躊躇之れを久ふすたまゝ僧あり出でゝ之れを迎ふ邦光實を以て告ぐ本間之れを聞き僧に命じ延て善く待遇せしむ然れども日を經るも見るを許さず更資朝に四室を出で洗沐せんことを請ふ資朝將に殺されんとするを知り乃ち曰く聞く吾兒遠く來ると一見だもするを得ず悲しむ可きかなと依て偈を作りて邦光に贈りて曰く天地無定主日月無定時舉有三才强有三綱謂之夢幻泡影爰和翁懷屈平之楚思八回倭遊以至今日爲汝一言決霜三尺曾不埋貞松士見之齡開眼清酒々落々獨立乾坤之間と遂に害に遭ふ僧あり屍を収めて之れを火き骨を邦光に致す邦光慟哭し地に投じて曰く『我をして

日野邦光

白骨を覩せしむるか』と僕をして骨を齎らし皈りて高町山に葬らしむ乃ち病と稱して滝留し毎に夜出で間を伺ひ本間を圖らんと欲す一夜風雨の甚しきを候ひ往いて其寢に至り進みて隙より闚ふ適ま本間在らず本間の子三郎燈下に熟臥し雙刀枕に倚る邦光謂らく聞く渠は刃を大人に下すと是亦父の仇あり之れを殺さゞ足らんと乃ち其刀を奪ひ以て之れを刺さんと欲し其の覺ること有んを恐れ遲疑之れを久ふすたま〳〵飛蚊あり群集す乃ち唾して紙障を破り蚊を縱ちて燈を滅せしめ因て入て太刀を取り以て其の胸に擬す既にして謂らく睡人は猶ほ死屍の如しと足を擧げて枕を蹴る三郎驚いて方に起んとすれば刃已に腹を洞して背に出づその喉を刳て之れを殺し出でゝ竹叢に匿るまた謂らく仇已に報ゆ徒死するも益なし君事に赴きて先志を濟し以て忠孝兩つながら全からしめんにはと出でゝ將に走らんとす隍あり廣さ二丈許り傍らに巨竹多し邦光之れに攀ぢ低きに跳ひて前岸に達す行て天明くるに遂びて麻田中に伏す追者數十人呼索して過ぐ夜に遂びて邦光また出て往く路に修驗者に遭ひて哀憐し死を救はんことを請ふ修驗者之れを負ひて津に至る商船の發せんとするあり請ふて附載す追者方さに至る船已に岸を離る因て免るゝことを得て越後に到り遂に京師に還る

北條高時誅に伏するに及び邦光出仕して左兵衛權佐と爲り後村上天皇の時左衛門督に轉ず正平五年敕を奉じて鎮西に至り宇治惟澄を促し兵を發して敵を擊たしむ後中納言と爲る十六年藤原隆俊及び細川清氏等と足利義詮を討て之れに克ち尋て引還る

土岐頼兼（多治見國長）

土岐頼兼は八郎と稱す美濃の人にして源頼光の裔なり父頼定伯耆守たり多治見國長は頼兼の族なり四郎二郎と稱す藏人たり頼兼と並び曉勇を以て著はる

土岐頼兼

土岐頼兼

後醍醐帝北條高時を誅するを謀り玉ふ及んで二人適まを京師に番直す藤原資朝引て同謀とおす頼兼の族頼春亦與かる頼春の妻は六波羅奉行齋藤利行の女なり一夕頼春妻に對して語り涕下だる妻怪んで之を詰る頼春遂に實を以て告げ深く戒めて泄すことなからしむ妻以爲らく『事濟らざれば我が夫死なん濟るときは我族滅びん如かじ早くその謀を發し夫をして難を免ぐるの功あらしめ而して父の家も亦全きを獲せしめんに』と遂にこれを利行に告ぐ利行大に駭き頼春を責めて曰く『如何んぞ此の不祥の計を爲せし事若し外より發せんに吾が屬類なかけん』と頼春曰く『計ごと頼兼國長に由る』と因て請ふて一身の保全を圖る

利行馳せて六波羅の北方常葉範貞に告ぐ明早範貞山本時綱小串範行をして兵三千を率ひ頼兼國長を分捕せしむ時綱單身潛かに頼兼の寢所に逼る頼兼方さに起て髮を理む時綱の至るを見て愕然躍り出刀を挺て搏鬪す既にして敵衆大に至る頼兼自から免れざるを知り走つて寢所に入り腹を割て死す家士悉く鬪死す

範行兵を率ゐて國長を襲ふ國長たゞ酒を被つて臥せり倉皇起す小笠原通弘適まその家に在り出でゝ敵衆を望み國長に告げて曰く『謀ごと已に露はれる君宜しく決する所あるべし』即ち弓矢を執り門樓に上り射て二十人を殪し刀を銜み樓下に投じて死す國長間に乘じその兵二十余人と門を開き鬪を挑む敵衆爭ひ進む國長擊てこれを卻く敵番陣して戰ふ辰より午に至り殺傷二百余人佐々木時信の兵千余人民舍を毀ち屋後より入る國長支ふべからざるを知りその兵二十二人と交刺して死す

藤原師賢

藤原師賢は内大臣師信の子なり家を花山院と稱す後醍醐帝位に即き玉ふに及び權中納言より正二位大納言に陞る帝北條高時を誅せんことを圖りたまふ師賢首としてこれに預かる既にして事洩る北條高時權中納言藤原

藤原師賢

資朝を捕ふ師賢北山に屏居す高時人を遣はし僧圓觀右中辨藤原俊基等を執らふ朝廷震恐するに及んで師賢乃ちまた出でゝ仕ふ高時兵を遣はし將さに帝を遷し奉らんとす師賢及び樓中納言藤原藤房夜る帝を奉じて禁中を出で三條河原に至る師賢に命じ衰龍衣を着し御輿に乘じ詐つて帝とならしめ樓中納言藤原隆資等これに隨ひ延曆寺に適き以て賊兵を綴るを圖る僧徒奉迎し護衛甚だ謹みこれを西塔に居く賊兵來り攻む僧徒拒ぎてこれを破る

既にして將さに本院を以て行宮とあさんと議す衆悉く來集し怨を促がすたゞ〳〵風輿簾を揚ぐ師賢の衰衣して坐するを見る衆皆愕然として相率ひて去る師賢隆資等と遁れて笠置に如く笠置陷ぬり藤房等と帝を扶けて出で奔る路に就て相失し獨こゝに就く薙髮して素眞と號す

明年夏高時これを下總に流し千葉貞胤の家に囚す師賢少かきより學を好み榮辱を以て心に經せずその配所に在る君を想及するごとに未だ皆て歇

歇流涕せずんばあらず自ら誦して曰く主憂ふるときは則ち臣辱められ主辱められるときは則ち臣死す今日何の時ぞ紐醯轢裂も患ふる所にあらず時に諷詠自ら遣る是の歲病んで薨す年三十二太政大臣を贈られ諡して文貞といふ

源忠顯

源忠顯は內大臣有房の孫樞中納言有忠の子なり家を六條或は千種又禪林寺と稱す弱冠にして騎射を好み賭博酒色を以て事となす有忠絕ちて子となさず仕へて左近衞少將となる後醍醐帝潛かに笠置に幸したもふ忠顯之れに從ひしかば笠置陷るに及びて擒にせらる帝六波羅の南方に御す敵忠顯藤原藤房を放ちて左右に給仕せしむ

既にして帝に從ひて隱岐に適く帝逃れて出雲に往かんと思召し夜る行在を出でたもふ忠顯從ふ路傍の民家を叩て千波湊を問ふ主人帝を熟視し對

源忠顯

て曰く湊に此を去る五十町計り路多岐にして迷ひ易し請ふ鄉導をおさんと帝を負ひて湊に到り舟を路めてこれに御せしむ舟人亦以爲らく常人に非ずと忠顯密かに之れに謂て曰く『是れ則ち天下の主なり急に出雲伯耆の間に至り形便の地を得んと欲するあり事成らゞ邑土を以て汝を賞せん』と舟人喜びて纜を解く佐々木清高輕輧を發して追及す人皆慌惚して爲す所を知らず帝舟人に宣へく『怖るゝ勿れ第だ釣を垂れよ』舟人乃ち帝及び忠顯を船底に匿し覆ふに乾魚を以てし柁工水手をして其上に列立せしめ身れ坐して釣りす賊御船に上りて遍く索む舟人徐ろに問ひて曰く公等何をか索む賊曰く主上逃れ去る必らず海中に在らんと舟人詐きて曰く今夜子の刻に船あり港を出づ一人れ冠し二人れ烏帽す簪纓の客あり今行くこと五六里可りと乃ち遙かに指して曰く船猶ほ彼しこに在りと追兵楫を轉じて去る

數日にして出雲を經て伯耆大坂港に到る忠顯岸に登りて路人に問て曰く

地に名を知られたる武人あるかと答ふるに名和長年を以てす忠顯使を遣れしてその家に造り宣旨して委託す長年即ち兵を起し帝を船上山に奉ず軍勢大に振ふ忠顯功を以て藏人頭左近衛中將となる赤松則村六波羅を攻めて利あらず忠顯命を奉じ往てこれを援く路に來屬する者多し忠顯衆を恃み功を專らにせんと欲し孤軍進みて京師に入り六波羅の兵と戰て利あらず忠顯兵を率ゐて叡堂に議して軍を退けんと欲す兒島高德苦諫して之れを止む忠顯怯懼し即夜恒良親王を奉じて男山に奔る時に足利尊氏内野より赤松則村東寺より京師に入る忠顯また竹田より入りて戰ふ北條仲時遂に光嚴帝を挾みて東に奔る忠顯神鏡を北山莊に得て禁中に奉ず車駕京師に還り玉ふ忠顯功を以て三大國又邑數十所を賜ひ食邑と爲し彈正大弼と爲り從三位に叙し參議に拜せられ寵渥比ひなし足利尊氏の闕を犯す忠顯結城親光名和長年等と之を拒ぎて大に勢多に戰ふ延元元年疫を削る尊て藤原雅忠と足利尊氏を西坂に拒ぎ戰ひ敗れて死す

源忠顯

北畠親房

北畠親房

北畠親房は村上天皇の皇子具平親王十二代の孫にして父は權大納言師重なり十一歳にして右近衛中將に任じ後ち權大納言に進み非學院の別當を兼ね伏見天皇以後五朝に歷仕し頗る推重せらる後醍醐天皇親房を以て皇子世良親王の傅となし玉へり天德二年親王薨ず親房痛悼し由て剃髮して玄々と號す時に年三十八

元弘三年車駕隱岐より還幸せらるゝや親房大臣に准し從一位に叙せらる此の年八月子顯家陸奥守となり義良親王を奉じて奥羽を鎭す親房その輔として同行し事を修めて皈京す尊氏の北條時行を討つや或は叛志ありと傳ふ天皇始めて之れを疑ひ尊氏誅伐の命を下し玉へんとす親房諫めて曰く『尊氏功ありと雖も罪跡未だ顯はれず俄かに兵を加ふべからず請ふ先づ其動靜を察せん』と將士傳聞して其の寛厚を稱す

延元元年尊氏京師を犯す親房天皇を奉じて延曆寺に至る既にして天皇尊氏の伴り降るを聽るし京師に入り玉ふ親房直ちに伊勢に走り度會郡に居る蓋し尊氏に屬するを惡みてなり天皇吉野に幸し玉ふに及び親房また至る時に顯家安倍野に戰死し新田義貞越前に敗死す三年親房の子顯信を陸奥介とし又義良親王を奉じ親房を補佐とし東國に下りて勤王の兵を糾合せしむ八月親房等伊勢に至り兵船五百餘艘を以て發す九月海上暴風あり親王の船伊勢に至り親房の船常陸に漂着し將士多く分散す親房小田城に入て官軍を招徠す

是より先き天皇芳野に崩じ玉ひ義良親王竟に御位に即き玉ふ（後村上天皇）親房王業衰へ建武中興の事全からざるを慨し竟に神皇正統記を著はし三種の神器を傳へ玉ふは正統の天子たることを論じ南朝は即ち天照大神の嫡系なるを明かにす興國元年之を吉野の皇居に上つる時に年四十七興國二年親房吉野の行宮に殿閣なく公卿微小にして輔佐の式殆んど廢絶せんとす

北畠親房

るを忠ひ小田城中に在て筆を取り職原抄を著はして吉野に献ず百官の位職を記すること甚だ詳かなり

親房の小田城に在るや屢〻賊將高野の師冬と戰ひて之を敗る興國二年六月師冬又小田城を攻む擊て之を却く十一月小田治久師冬に降る親房由て關城に走り援を結城親朝に請ふ親朝欵を賊に通じて兵を出さず親房書を贈りて之を責む書辭極めて剴切なり四年關城竟に陷り親房吉野に皈る正平五年足利直義尊氏と隙あり降を南朝に請ふ廷議許さず親房權宜を以て之を許さんと奏し乃ち降を受く六年親房三宮に准し輦車宮に入るを許さる正平七年親房天皇に屬して行宮を發し男山に至る楠正儀及び親房の三子顯能等來り會し賊將細川顯氏を敗り郷春を斬て義詮を近江に走らし竟に北朝の主光嚴光明崇光の三院を男山に押送す是れ實に南朝の一大奇勝なり然れども義詮大兵を以て返り攻めしかば車駕竟に河内へ退き玉ふ親房慨然として謂へらく『是れ戰の罪にあらず帝德未だ至らざる所あるか』竟に紀伊和歌浦の北山に庵を營み林鶯軒と題して爰に退隱し自から名を憶西翁と稱す正平十四年四月竟に林鶯軒に薨す年六十八

親房また古今集註東家秘傳元々集二十一社等を著はす親房の三子顯家顯信顯能皆王事に勤む忠義一門に萃まる顯能後世々伊勢を領し門閥を以て國人に重ぜらる

○北畠顯家

北畠顯家は大納言親房の長子なり元應嘉曆の間從五位上に叙し累進して侍從左近衛少將を兼ね元弘元年參議に任じ左近衛中將となる時に年十四是の春後醍醐天皇藤原公宗の北山莊に幸す顯家陵王を舞ふ容貌閑雅俯仰節に中る天皇物を賜ひてこれを賞し玉ふ天皇天下新に定まれるを以て東陸を鎮撫せんと思ひ顯家を以て陸奥守と爲し出でゝ陸奥出羽を鎮せしむ顯家乃ち義良親王を奉じて行く居ること二月兩國皈服す建武元年功を以

北畠顯家

北畠顯家

て從二位に叙し二年鎮守府將軍を兼ぬ詔して義良親王を奉じ新田義貞と足利尊氏を鎌倉に攻めしむ顯家兵を國府に集む時に發する能はず乃ち見兵を率ひ轉戰して前む延元元年鎌倉に抵る尊氏已に西上す時に東北の諸將來り屬す兵凡そ五万尊氏を尾して晝夜兼行し近江に至る帝船七百隻を遣はして顯家を迎ふ顯家湖に泛びて延曆寺に至り新田義貞と園城寺を攻めてこれを克ち遂に諸將と道を分ちて尊氏を攻む顯家二万人を率ゐて粟田口より火を放ちて進む尊氏數十万人を率ゐてこれを禦ぐ戰數合顯家の兵善く戰ふ尊氏破ること能はず並びに解て憩ふ義貞因て兵を縱ちて突擊す尊氏敗走すまた兵を豊島河原に出し再び尊氏を攻む顯家先登す諸將繼ぎて進み大にこれを敗り尊氏西走す乃ち義貞と京師に凱旋す右衛門督檢非違使別當を兼ぬ時に尊氏の黨與四方に蜂起す是に於て顯家義良親王を奉じてまた陸奥に往く詔して常陸下野の二國を併せ管せしむ尋て鎮守府將軍に任じ權中納言に拜せらる進みて相馬胤顯を法華堂に相馬光胤を小

高城に攻めてこれを斬る

二年春陸奥の將士多く尊氏に應じて顯家を攻む顯家戰ひて利あらず結城宗廣と義良親王を奉じて靈山城を保つ敵又來り圍む帝顯家をして京師に赴き足利直義を討たしむ詔書至る詞辭甚だ懇篤なり顯家これを衆に示す衆感激す因て靈山を發して白川關に至る管内の兵士來り赴く者幾十万進みて宇津宮に至り兵を駐むること數日にして發す足利義詮の兵利根川を扼すたま〳〵霖雨水漲り衆涉ること能はず顯家の部下齋藤實永及善豊次郎流を乱りて進む敵これを中流に防がんとして溺死する者算なし顯家進みて相模に入り北條時行新田義興と鎌倉を攻めて義詮を走らす

三年兵を率ひて京師に赴く沿道の敵軍往々起りて尾擊す顯家乃ち陣を青野原に駐むたま〳〵尊氏高師泰を遣はして黑地川に拒がしむ土岐頼遠等又至る顯家前後に敵を受け道を伊勢に取りて將に吉野に赴かんとす師泰追ひて雲津川に至る擊ちてこれを卻け兵を奈良に休む尊氏桃井直常を遣

北畠顯信

nして之を邀ふ顯家の兵疲れて戰ふこと能わず潰へ走る顯家河内ゑ逃れ敗卒を收めて男山ゑ據る軍勢また振ふ尊氏高師直を遣してこれを攻めしむ敵軍利わらず師直河内攝津の官軍顯家と特角の勢を爲んことを慮り重兵を留めて城を圍ましむ身天王寺ゑ陣して援路を絕つ顯家城を出でゝ與ゑ戰ひて大ひに敗れ二十余騎を從へ將ゑ圍を突き吉野ゑ奔らんとして自ら接戰し遂ゑ陣ゑ沒す時ゑ年二十一從一位右大臣を贈らる

北畠顯信

北畠顯信n親房の次子なり右近衛少將に任し春日少將と稱す延元元年後醍醐天皇の花山院に在すや顯信兵を伊勢ゑ起し縞かゑ興復を圖らんことを奏請す帝乃ち潛かゑ吉野ゑ幸す三年兄顯家ゑ從ひて土岐頼遠を青野原ゑ破り男山ゑ據る既ゑして高師直攻めて顯家を殺し遂ゑ顯信を圍む源持定等來り援ふ顯信出でゝ師直を擊ちて利あり相持すること數月帝兵を遣

nして之を救ひ且つ新田義貞ゑ勅して速かに赴き援けしむ師直これを患ひ人を遣nし山上の神祠を火かしむ城中騷擾す敵兵これゑ乘じて競ひ登り將ゑ柵を破らんとす城兵ゑ松山九郎と云ふ者あり多力ゑして怯あり股慄して戰ふこと能わず高木十郎劒を按して叱す松山乃ち起ちて巨石を抱いて亂投すること十余敵敗れて崖谷ゑ陷ち城因て陷らざることを得たり然れども糧資既ゑ竭盡せるを以て支ふること能わず顯信遂ゑ城を弄てゝ河内に走る

尋て近衛中將ゑ轉じ從三位に叙し陸奥介鎭守府將軍を兼ぬ親房と義良親王を奉じて往々陸奥を鎭し東國の官軍を總督せんとして會ゑ海風暴かゑ起り顯信義良親王と漂流して伊勢の篠野ゑ至り親王遂ゑ行在ゑ還る帝崩じ玉ひ後村上天皇遺勅を顯信ゑ宣して恢復を圖らしめ玉へり

興國元年鎭ゑ赴き白河城ゑ居る明年石塔義房の城を攻めてこれを拔く四年顯信宇津峯宮を奉じて陸奥に留居し靈山宇津峯の二城を守る正平二年

北畠顯信

結城顯頼相馬親胤等來り攻む顯信敗走す六年又宇津峯宮を奉じて兵を起す伊達飛彈前司田村莊司等來り屬す乃ち進みて國府を攻め敵將吉良貞家と倉本河廣瀬河等の處ゑ戰ふ既ゑして尊氏皈順の報至るを以て兵を罷む明年吉良貞家結城相馬等の兵を率ひて來り攻む顯信利を失ひ退きて宇津峯城を保つ敵又來り迫る顯信宇津峯宮と俱ゑ城を棄てゝ逃れ後吉野ゑ還る正平中中納言と爲り征西大將軍懐良親王ゑ從ひて少弐頼尚を筑前大原ゑ討つて戰沒す

○結城親光

結城親光ハ宗廣の子なり九郎と稱す檢非違使左衛門尉たり大江判官と稱す元弘の役北條高時ゑ屬し大佛貞直ゑ從ひ赤坂城を攻てこれを破り仍ほ往て六波羅ゑ居り官軍を拒む護良親王の令旨を得るゑ及んで順逆勢を異ゑするを知り俄かゑ出でゝ山崎ゑ至り赤松則村ゑ因て皈順す

親光驍悍ゑして善く戰ふ帝これゑ倚頼し恩遇甚だ渥し稍く政務ゑ參預す足利尊氏京師を犯すに及んで親光源忠顯ゑ從ひこれを勢多ゑ拒ぐ王師遂ゑ敗績し乘輿出でゝ延暦寺ゑ幸す親光意ろ尊氏を刺さんと欲し獨り留つて京師ゑ居り僧ゑ因て詐つて降るを乞ふ尊氏これを恠み大友貞載をして出でゝその狀を察せしむこれゑ途ゑ遇ふ貞載卒然として之ゑ謂て曰く『將軍卿が欵を送るを以て僕をして來り降りを受けしむ宜しく甲仗を解くべし』親光その己を疑ふを知り輙ち刀を拔てこれを斬る貞載即ち馬より墮て死すその下三百余人鬨聲甚だ急あり親光及び從士十四人これと交刺して斃る時人甚だ嘆惜す

土居通治（得能通言）

土居通治ハ通稱二郎と稱す得能通言ハ彌三郎と稱す並び伊豫の人ゑして河野氏の族なり通治備後守ゑ任ず後醍醐帝船上山ゑ出御し玉ふゑ當つて

土居通治　得能通言

土居通治　得能通言

通治通言共に義を擧げ地を畧して土佐に入る長門探題北條時直來り擊つ通治通言これを星岡に戰ひ大に之を敗る時直遁走す是に於て四國の兵士悉く來り屬す通言乃ち舟を具し將に進んで京師を復せんとすたま〳〵諸軍已に京師を收め車駕宮に還らんとす通治通言乃ち兵庫に迎謁し因てこれに扈從す

時に北條氏の遺黨赤橋重時伊豫立烏帽子城に據る通治通言討てこれを平らげ尊て伊豫に還る足利尊氏京師を犯すに及んで通治通言戰艦三百余隻を發し入援し足利直義と豐島河原に遇ひ奮擊してこれを走らす俄氏再び闕を閲ふ通治通言これを拒んで利あらず愚に隨て延暦寺に往く新田義貞皇太子を奉じ往て北國を經畧す通治通言族通繩とこれに從ふ通言通繩三百余騎を以て殿す行て鹽津に至り大雪に合ひ遂に前軍と相失す敵兵あり奄ひ至る通言通繩の士馬凍餒して戰ふこと能はず乃ち衆と刀を拔き地に植てその上に伏して死す

通治の皇太子に從がひ金崎城に居る城陷るの日兵を率ゐてその一面を防ぐこと數刻創を被むり力ら索き即ち衆三十二人と腹を刳て死す通治通言驍勇無双よく節を執て始終せしかば人皆歎惜す

尊良親王

尊良親王の嘉曆元年冠して中務卿となる幼きときより聰慧にして容姿甚だ閑雅あり人皆その太子たらんことを望む北條高時後二條帝の子邦良を立て〻太子とおす（後亦尊良恨鬱す）元弘元年笠置に幸するに從ひ尊て楠正成の赤坂城に入る笠置陷り帝幽せらるゝと聞き自から京師に赴く賊執へて佐々木時信の家に拘す二年土佐の畑に遷さる三年亂平ぎて京師に皈る

建武二年足利尊氏反す勅して尊良を以て東國管領となしこれを討たしむ新田義貞これに副たり義貞尊氏の先鋒と矢矧驚坂に戰ひ連りにこれを破

尊良親王

尊良親王

る尊良脇屋義助等を率ゐ竹の下より向ひ尊氏と當る官軍利あらずたまゝ大友貞載鹽冶高貞賊より降り兵を倒しまゝして以て戰ふ尊良敗績す

延元元年尊氏京師より迫るとき延暦寺より幸するに從ひ冬皇太子恒良を輔けて越前金崎城を守る賊攻むること甚だ急にして糧仗繼がず明年春城將さに陷らんとす新田義顯尊良に啓して曰く臣は將家の子義苟くも生きと大王は帝室の胄縱ひ賊中に陷るも必らず敢て害を加へざらん願くは自から輕んずる勿れと尊良莞爾として曰く『主上孤を以て首領となし卿を股肱と爲し玉ふ夫れ股肱亡びて而して首領安きを得るは未だ之れあらざるなり當さに命を白刃に殞し儻を黃泉より報ずべし而して孤宮闕に生長し武事に習はず自裁の法當さに如何すべきを知らず』と義顯泣て曰く『樣當さに此の如くすべし』と乃ち腹を潰し刀を尊良の前に置て伏す尊良その刀を執れば流血棚を漬たし滑かにして握るべからず衣袖もて棚を纏ひ胸を洞して薨す左近衛中將藤原行房及び將士の自殺するもの三百余人賊尊良の首を

京師に傳ふ尊氏僧疎石をして之れを臨林寺に葬らしむ

楠正成

楠氏はその先左大臣橘諸兄に出づ世々河內に住し金剛山の麓七郷を領す諸兄より十三代の孫を正俊といふ正成幼にして穎智人に過ぐ曾て某寺に在り衆僧を會し巨鐘を指して曰く『誰れか俊手これを動かすものゾ』衆敢て答ふるものなし正成曰く『我れ一指して動かすべし』と衆僧嘲りてこれを信せず正成乃ち一指を以て巨鐘を推し旦より暮に至る鐘竟に少し搖く衆僧驚嘆して神となすといふ

既に長じて兵衛尉となる元弘元年後醍醐天皇の笠置に幸し玉ふや衆徒來りて勳を奉せりと雖も未だ知名の將にして一人の會する者なし帝頗るこれを憂ひ玉ふたまゝ僧快元の言により河內に楠正成なる者あるを知り玉ひ藤房を遣はして之れを徵さしむ正成即ち行在に至る帝藤房をして命

楠正成

を侍へしむ曰く『今日の事一は卿を煩わさん卿それ如何る策を以て廟勝を決する能かはその所見を述べよ』正成對へて曰く『逆賊の暴逆自ら禍誡を取る天誅の加ふる所勝たざるあし但だ東兵は勇ましく謀あし若し力を以て爭わゝ武藏相模の兵は天下に敵あし謀を以て是を屈せば則みし易きのみ然れ共成敗は兵家の常事成わ小邨に遇ふも願くば聖慮を煩わす事勿れ臣の存するあらば何ぞ濟らざるを患へんや』と辭して赤坂に皈り將さに乘輿を爰に奉ぜんとす而して笠置既に陷りしかば北條貞直足利尊氏等六十三將兵十餘万を以て赤坂を圍む時に赤坂の兵僅かに五百人のみ正成その三百を分て城を出で山によつて東軍を待たしむ東軍肉薄して之を攻む城兵亂射して立ろに千餘人を斃す東軍沮却し甲を解きて憩ふ伏兵三百その左右より起る正成二百騎を以て自から突出し合擊して大に之を破る翌日東軍また城を圍む正成大石巨木を投じて七百人を殺す東軍竟に營を築きて城を圍み持久の計をなす而して城内僅かに五日の食を餘すのみ正成曰く

我れ天下に率先して事を舉ぐ固より生を期せず然れども天皇猶ほ在ませも我れ未だ死すべからず今佯つて死せば敵則ち去らん去らば復た起り敵をして本命に疲れしめん是れ身を全ふして敵を亡すなり之を猶かに遁れて金剛山に入る

元弘二年四月正成金剛山を出で赤坂城を復して湯浅定佛を降し和泉河内を徇へ進んで天王寺に陣す五月六波羅の兵と戰ふて大に之れを破る天王寺固と上宮太子(聖德太子)の闕文あるものを藏す正成請ふて之を視る文に當人王九十五代天下一亂而主不安此時東魚來呑四海日沒西天三百七十餘箇日西鳥來食東魚其後海内皈一三年如猿猴者掠天下三十餘年太凶變皈一元」とあり正成衆に示して曰く『九十五代は當今なり東魚は高時にして西鳥は尊氏なり日西天に沒する三百七十日天皇の皈ら食まるゝは竟に滅するを謂ふなり其れ明春乎』衆由て大に振ふ此の冬正成金剛山の地を相して千劒破城を築く

楠正成

楠正成

元弘三年二月高時關東の兵を發し吉野の赤坂千劔破を攻めしむ既にして東軍赤坂及吉野を陷し盡く千劔破に會す兵數八十万と稱す正成千餘人を以てこれを防ぎ大石を投じ隨てこれを射る東軍十二人の書記をして死傷を錄せしむるに三壺夜筆を閣かざりしといふ由て諸軍を戒めて城に迫ること勿らしむ時に會ま大旱ありて東軍水を絶んと欲し名越高家をして東溪を守らしむ而して城兵の出でゝ汲ひものおし正成敵の守兵怠るを待てこれを襲ひその旗幟を奪ふて城上に建て大に東軍を罵らしむ高家慚憤して城を攻む城兵射て四千人を殺す東軍乃ち長圍を築きて環守す又雲梯を造り城壁に架せしむ正成油を注て梯を燒く東軍焚死するもの數千人群鳥して退く

たまゝ近郡の民兵護良親王の令を奉じて賊の糧道を絶つ賊兵大に困み逃亡する者相繼ぐ北條仲時時益又宇都宮公綱を遣はして援け攻めしむ公綱手下千人を以て疾く攻めれども拔くこと能はず千劔破の勝報諸國に傳

楠正成

はるや所在勤王の師次ぎ起り諸將遂に六波羅を攻めて之れを破る是に於て千劔破の敵皆圍を解て去る六月車駕京師に帰らせ玉ふ正成乃ち兵七千を率ひて兵庫に迎謁す帝親らこれを勞して宣はく大業の速かに成るは皆卿の力なり」と正成拜謝す因て護衛して入京す

延元元年尊氏大兵を率ひて西上し官軍を破りて京師に入る天皇叡山に幸し玉ふ正成義貞と謀を合せ大に尊氏の軍を破りて京師を復す尊氏九州に走り車駕乃ち京師に還幸したまへり

尊氏の筑紫に走るや正成義貞に勸て窮追せしむ義貞從はず延元元年五月尊氏弟直義と共に九州の兵を率ひ海陸二道より進む義貞之を兵庫に防ぐ兵士多く逃亡す乃ち急を朝廷に報ず天皇正成をして赴き援はしめ玉ふ正成策を献じて曰く賊今衆を盡して來る鋒鋭くして當るべからず車駕再び叡山に幸し義貞を召還して賊を京師に入らしめ而して臣河内に還り賊の糧道を絶ち疲ひで之を攻めば一戰にして破るべし參議藤原清忠固く諫て

楠正成

聽かず正成退きて曰く『事爰に至る今何ぞ抗議せん』と五月十六日弟正季等と闕を辭して兵庫に至る時に尊氏水軍に將たり陸軍五十万と稱す正成七百騎を以て湊川に陣し義貞三万騎を以て和田岬に在り水軍を防ぐ尊氏の全軍竟に陸に上る正成顧みて正季に謂て曰く『我れ腹背敵を受く遁る可からず是に於て兄弟並に陸軍に突入し七離七遭幾んど直に尊氏六千人を遣して軍後を斷つ正成兄弟馬を回へして之れを當り血戰十六合盡くその騎を亡ひ餘す所僅かに七十余騎正成乃ち正季と走りて湊川の民舍に入り坐して鎧を釋け身十一創を被る顧みて正季に謂て曰く『死して何をかおす』と曰く七たび人間に生れて國賊を殲さん』と正成欣然として曰く是れ吾が心を獲たりと相刺して死す正成時に年四十三宗族從士五十余人悉くこれに死す帝追悼して已まず正三位左近衛中將を贈る明治中從一位を贈らる

德川光圀最も皇室を尊崇し元祿四年碑を湊川に建て題して『嗚呼忠臣楠子之墓』と正成曾て禪を修む湊川に赴くや廣嚴寺に入り明極禪師に參禪すと

（正季と共に七生云々なる語は戰死の死悟なく亂軍の間に討死したりと未だいふ田野安藤氏等の既に正成に湊川に於て戰死の眞偽を知らず只其眞偽をしてこれに掛けるのみ）

楠正行（和田正朝、同賢秀）

楠正行は正成の子なり延元元年父死する時年甫めて十一正成これを河內に遣はし誡めて曰く汝幼なりと雖も已に十歲に過ぐ猶ほ能く吾が言を記せよ今日の役天下安危を決する所意ふに吾また汝を見ず汝愼で禍福を計較し利に嚮ひ義を忘れて乃父の人の存するものあらしめ則ち率ひて金剛山の麓趾を守り身を以て國に殉し死ありて他あること勿れ汝の我に報ずる所此れより大なるいなしと因て帝の嘗て賜ふ所の寶刀を以て之に授けて訣る

既にして正成戰死す尊氏正成の首を見て嗟嘆す竟にこれを河內に贈る正

楠正行　和田正朝、同賢秀

楠正行　和田正朝、同賢秀

行これを見て直ゝ持佛堂ゝ入る母怪んで之を窺ふ正行將ゝ自刄せんとす母走り入てこれを止めて曰く汝狂せる乎先君の汝を殘せしものゝ汝をして自殺せしめんが爲ゝ非ず止だ賊を亡ぼして宸襟を安じ奉り先君の仇を復せんが爲めのみ』と刀を奪て且つ泣き且つ諫む正行大ゝ感悟し是より恢復を以て志とおし遊戯常ゝ群童を仆し敵を斬るまねし竹馬を走らし以て尊氏を追ふと爲すその母賢ゝして貞正行を敎導し將士を撫育して四境を固めしむ

延元元年尊氏倅て降を請ひ車駕を京師ゝ迎へ奉り迫て三種の神器を新主ゝ傳へんと請ふ十二月天皇潛かゝ遯れて吉野ゝ入り玉ふ正行和田正朝等を率て警衛す天皇由て正行を正四位下ゝ叙し帶刀と爲し竟ゝ父の官を襲ねしむ

檢非違使左衛門尉ゝ任じ河内守を兼ねしむ

元弘三年天皇吉野の行宮ゝ崩じ玉ふ後村上天皇遺詔ゝ因て御位ゝ即き玉ふ正行兵を率ひて護衛す大喪の後と雖も衆情爲めゝ大ゝ安し

正平二年九月正行金剛山ゝ在り京師を復せんと欲し細川顯氏と畠田林ゝ戰ふて之を破り十一月又顯氏及び山名時氏を瓜生野ゝ邀擊して大ゝとれを破る京師震駭す竟ゝ進んで京師ゝ逼らんとす尊氏大ゝ懼れ二十餘州の兵を發し高師直を將として正行を擊たしむ正行弟正時と行在ゝ詣り奏して曰く『先臣正成臣ゝ遺訓するゝ勤王の事を以てす時ゝ臣年十三今ゝ至て言猶ほ耳ゝあり臣天資多病不幸ゝして徒らゝ蓐上ゝ死せば遺憾これより大なるはなしこの役や臣が劍師直の首を貫かざれば臣が頭を以て師直に授けんのみ願くば一たび天顏を拜して行かん天皇乃ち正行を引見して曰く『乃父の忠義ハ天下比おし今朕が賴む所は汝一人のみ軍若し利あらずとも必ず敢て死する勿れ』と正行涙を拭ふて退く乃ち先帝の廟ゝ謁し恭しく謝して曰く『戰若し利あらざれば必ず生て還らず』と鐸を叩て起つ弟正時以下百四十三人の姓名を如意輪堂の壁ゝ記し

返らじとかねて思へば梓弓あきかゞゝいる名をぞ止ひる

楠正行

楠正行

と和歌一首を題して出づ

天皇勅して隆資を遣はし正行を援けしむ賊兵八万分て五隊とおし四條畷に陣す正行三百騎を以て直前し賊の諸隊を破て奮進す而して隆資の軍竟に敗る正行顧みず三百騎を以て直前し賊の諸隊交々防ぐを悉く擊破しその騎を衆むるよ馬皆傷けり乃ち馬を捨てゝ丘よ踞して怒を傳ふ賊兵環視して肯て迫らずその走路を開く正行曰く『必ず師直を獲べし』と進んで賊の中堅を衝き奮戰して師直よ迫る師直の臣佯て師直と稱して死す正行大よ喜び首を空よ拋つもの三ッ或人その實を告ぐる者あり正行蹴て罵て曰く『奴も亦無双の國賊あり』と已よして曰く『その勇嘉すべし』と首を袖よ包みて丘よ登き復た進んで師直を索む賊兵披靡す竟よ射手を出して亂射す正行力戰すること三十餘合身よ箭を蒙ること蝟の如し竟よ正時と交刺し北よ向て斃る年二十二從士皆戰死す時よ正平三年正月あり明治十年從三位を贈らる

是より先き宮女辨内侍姿色あり師直これを奪はんと欲し内侍を誘出し卒を遣はして之れを迎ふ正行參朝の途これよ遭ふ内侍輿中に在て悲泣す正行悉くその卒を斬り内侍を護して吉野の行宮よ詣る天皇これを賞し玉ひ内侍を正行よ賜ふ正行歌を奉りて固辭す曰く

とても世にながらうべくもあらぬ身の假のちぎりをいかで結ばん

聞くもの悲しまざるおし正行死するに及び内侍落飾してその後を吊ふといふ

正行の弟正儀また河内に據りて能く戰ふ吉野爲めよ亡びざるを得たり蓋し南朝天下の人心を失して而して尚ほ吉野よ偏安せし者は實よ楠氏在りしが故あり

和田正朝は新兵衛と稱す正平三年高師直等來り攻む正朝弟賢秀と正行よ從ひて吉野の行宮よ詣り延辭す同志百四十余人と俱よ死を誓ふ進んで師直を四條畷よ敗る鼻田職俊師直の旗幟を視て之れを追はんと欲す正朝曰

楠正行　和田正朝、同賢秀

楠正行　和田正朝、同　賢秀

く『彼れ騎よして我れ歩あり追ふも及ぶべからず我陽り走る如くせば彼必ず來り追はん即ち進み戰へば師直を獲べし』と乃ち殘兵五十餘人と楯を負ふて退走す高師冬兵三百を以て後を躡す正朝返戰して大よ之れを敗る既よして從兵悉く沒す正行等自ら刺して死す正朝還て其狀を奏せんと欲し南よ向ひて單行す阿保忠實疾呼で曰く『楠家皆死す何を忍んで獨り亡ぐる』と正朝笑て曰く『何ぞ難からん』と刀を揮て之れよ赴く忠實馬を廻らして却走す正朝去れば又た之れを追ふ此の如きこと數次會ま敵の餘騎至て射る正朝矢を被り遂よ忠實よ殺さる

正朝の弟を正興といふ延元三年源顯家和泉よ陣す弟顯信をして八幡よ據らしむ正興橋本正茂と兵を發して之れよ應じ丹下城を攻め數日にして高安の敵營を燒く既よして顯家戰沒す正興軍を轉じて八幡を救ふ北兵路を遮る轉戰して進む未だ幾くあらず八幡の軍散ず正興兵を廻らし松原野田等の營を攻む尋て落髮して賢秀と稱す正平中正行よ從ひ細川顯氏と住吉

よ戰ふ賢秀手數十人を殺す敵驚いて敗走す又追ふて山名兼義を斬る四條畷の役賢秀尚ほ敵兵よ混じ師直を狙擊せんと欲す其間相距ること數步正行の部下湯淺某降て師直の軍中よ在り賢秀を認て後より斫て之れを踣す就て其首を斬る賢秀眼光炬の如く猶ほ瞪視して瞑せず此れより湯淺俯仰唯だ賢秀が眼を張り己れを睨むの狀を視る七日よして終よ死す

楠正儀

楠正儀は正成の子正行の弟なり左衛門尉河內守よ任ぜられ左馬守よ遷る兄正行戰死せしとき正儀留りて河內よ居りしかば高師泰墨ヶ石川よ築き正儀を攻む畠山國清尋でこれよ代る正儀始終固く守る既よして國清南朝よ帰順せしかば正儀兵を出して之れが聲援を爲す正平七年足利義詮欵を送る帝親ら軍を御したまひ京師に幸すと宣言すその實は義詮を襲ふよ在り行て住吉よ次す正儀和田正忠と兵五千を率ゐて

楠正儀

夜る桂川を渡り味爽に細川顯氏と戰てこれを敗る細川頼春隨て至る正儀の兵楯を以て梯と爲し屋に登りて亂射す敵兵披靡す正儀騎を縱ちて突擊し頼春を斬り義詮を走らす車駕蹕を男山に駐む義詮大兵を率ひて來り追る正儀正忠兵三千を率ゐてこれを荒坂山に拒ぎ稍々利を得たり然れども衆寡敵せず退て男山に陣す敵兵合圍す而して勤王の兵至らざりしかば衆議正儀正忠をして河內に還り兵を募らしむ正忠家に還り暴かに病みて死す既にして義詮また京師を陷る世正儀が速かに出兵せざるを議す正儀兵を發し吉良滿貞等と攝津を攻めて守護代某を伐ちて之を走らす明年藤原隆俊に從て義詮を京師に攻む義詮神樂岡に陣し兵を出して林間に隱れしむ正儀等その衆寡を知らんと欲し兵五百を遣わし馬を下り徒步して之を誘ひ以て敵陣に近かしむ佐々木信詮出でゝ戰ふ正儀擊てこれを郤く義詮戰わずして遁る

十四年足利義詮天野の行宮を犯す正儀和田正武と入り奏して曰く『是の戰

わ臣等が官軍の爲めに必勝を保つ夫れ兵の貴ぶ所の者三つあり曰く天の時地の利人の和あり敵この三者を失す百万の衆ありと雖も畏るゝに足らず但だ行宮の地狹便あらず請ふ蹕を觀心寺に移さんことを帝深くこれを然りとし移りて觀心寺に御す正儀後ち砦を龍泉龍門平石八尾に築き兵を分ちて之を守らしめ自ら兵三百を以て赤坂城に據る畠山國清等津山に陣し進んで諸砦を陷し竟に赤坂を攻む正儀退て金剛山を保ちこれを誘ふ義詮尋て引き還る

十六年正儀又兵を渡邊に出し佐々木秀詮及び弟氏詮を攝津に攻めてこれを破る殺獲二百七十餘人水に溺るゝもの甚だ多し追つて秀詮氏詮を斬り俘虜を錄し悉く醫藥を給し放ち還へす是の年細川清氏降り奏して諸軍を發し京師を復せんことを請ふ帝正儀を召して議せしむ對へて曰く『元弘以來王師の京師を復すること凡そ五たび多くは師徒を假らず苦む所わ威力の繼がざるを以てなり是を以て屢ば是を得ると雖も屢ばこれを失ふ今と

楠正儀

れを取らんと欲せゞ清氏の力を須ひざるも臣一人よして以て之れを辨ずるよ足らん唯恐くばこれを取るの後また能く守る能わざることを若じこれを弄つるを恥ぢて戰を致さゞ則ち今の版圖を舉げて併はこれを失わん臣愚未だその可を見ず』と而して帝及び公卿侍臣は故都よ還らんとする切あり是を以て從わず竟よ正儀よ命じ清氏と俱よ進みて京師よ赴かしむ

十二月官軍京師を復す幾くあらずして義詮水陸の軍を督して來り迫る明年正月官軍京を弄てゝ南よ走る果して正儀の言の如し既よして清氏戰沒し王師殆んど燼す正儀敵兵の勢よ乘じ官軍の沮喪せんことを懼れ一戰して之れが氣を勵ますんと欲し民兵を糾合して六千人を得乃ち進みて攝津を攻め淨光寺の砦を拔く敵大兵を發して來ると聞き兵を率ゐて河内に還る居ること久しふして左兵衛督よ任ぜらる

二十三年帝崩じ玉ふ正儀細川頼之の誘ふ所と爲り足利氏よ降る或い曰く正儀の足利氏よ降るといふい非ずりと弘和の初め又南朝よ叛順すそのち

衛門督たること舊の如し義滿山名氏清よ命じ來り攻めしむ正儀氏清と平尾よ戰て敗績し宗族六人家人百四十人これよ死す正儀引き還りてその舊邑を保つ尋て參議よ任ぜられ元中中卒す

正儀人とあり遲重謀ごとを好み誠信物よ接しその兵を行り敵よ臨む先づ謀りて後ち戰ふ故よ多く敗よ至らず而して機を決し變よ應ずるい又その短ある所あり正儀子あり正勝正元といふ

楠正勝は正儀の子あり父沒する後代つてその衆を領し河内守と爲り有馬頭を兼ね從四位下よ叙す元中五年畠山基國山名氏清等と河内よ戰ふ七年二月また戰ふ利あらず廿九年春正月正勝渡邊競と畠山基國及び義深と千劍城よ戰ふ利あらず足利義滿使を遣いして正勝よ降を說かしむ正勝謝して曰く『吾家父祖三世忠を王室よ盡す子弟昆族も異志あることあし今生を貪り利に奔り以て君父よ背く罪之れより大あるはあし』と謹辭す是に於て義滿益す兵を發し千劍城を圍みその糧道を絕つ正勝力盡きて吉野よ奔る

楠正儀

楠正儀

十月義滿大内義弘をして來て兩朝の和議を講ず天皇之れを許し給ひ京師に還幸したまふ正勝無聊抑鬱十津川に潛居す應永六年義弘兵を擧げて堺浦に據る遠近大に振ふ正勝及弟正秀と兵三百に將として泉地肥前守と義弘を拔く冬に至て城陷り義弘敗死す其子持弘出で降る正勝その徒に謂て曰く『徒らに死するは益あし降を乞ふも亦我が羞づる所あり』乃ち兵を引て大和に走る後事缺して傳へらず

弟正元は左衛門尉に任ず新判官と稱す兄正勝に從て數〻戰功あり元中九年春千劍破陷る正勝と共に十津川に流寓す尙ほ不戴天の志を抱き間行して京師に入り義滿を狙擊せんと欲す遇卒之れを覺り兵數百を以て之れを圍む正元奮戰して數人を斬り執へらる義滿之れを壯とし謂て曰く『若能く志を改め吾に事へば長く富貴を保たしめん』と正元泫然流涕して曰く王室頽敗して之れを扶くる能はず吾寧死して餘罪ありと遂に屈せずして斬らる實に明德元年五月なり

新田義貞

新田義貞は小太郎と稱し上野新田郡の人にして源義家十世の孫なり後醍醐天皇の兵を擧げ玉ふや高時大兵を遣りてこれを敗り覺に天皇を隱岐に配し奉る時に楠正成千早城に據り寡兵を以て獨り關東の大軍と戰ひ屢〻これを窘しむ東軍拔くこと能はず軍情稍〻解弛し私かに背叛せんと欲する者あり護良親王また兵を吉野に擧げ檄を諸國に飛して勤王の兵を徵す義貞千早城攻兵の中に在り親王の令書を得疾と稱して上野に歸り元弘三年弟義助と大館宗氏堀口貞滿等百五十人をひきゐて義兵を生品祠前に擧げ中黑の旗を建て令志を拜讀し兵を笠懸野に出す越後信濃の諸源五千余人來會す進んで武藏野に至りしに上野下野常陸武藏の兵士期せずして來り集る衆已に二万余人聲勢大に振ふ高時兵を遣はして之を擊たしむ兩軍大に武藏野に戰ふ鎌倉の兵利あらず已にして高時の弟泰家赴き援け大に

新田義貞

義貞の軍を敗る三浦義勝六千騎を以て義貞に屬し不意に泰家を襲ふ泰家等敗れて鎌倉に返る義貞破竹の勢に乘じ三道より並び進んで鎌倉に迫り一日一夜にして六十五戰す大館宗氏極樂坂を攻めて敗死しその兵潰散す義貞乃ち精兵二万を率ゐ夜る間道に循て極樂坂に赴く賊兵數万固く坂上を守り柵を列ねて蹊路を絶ち多く戰艦を海岸に列ねて軍輙く過ぐることを得ず義貞乃ち馬より下りて海に臨み冑を免て伏膝し佩ぶる所の金裝刀を解きこれを海中に投ず曉に及び潮退き砂露いるゝこと二十余町戰艦皆臨ひて漂ひ去る義貞大に悅び衆を麾き直に海を渉りて鎌倉に入り風に因て火を放つ府第皆焚く衆勝に乘じて四面より攻鬪す死傷算なし高時遂に葛西谷に遁れ族を擧げて自殺す師を出してより此に至る凡そ十有五日にして鎌倉平ぐ乃ち使を馳せて捷を行在に奏す天皇大に喜び玉ひ遙かに義貞に左馬助を授けらる

建武元年入朝す從四位に叙し左兵衛督播磨守に任られ上野播磨の二國を管し京師に宿衛す天皇方さに足利尊氏を寵任してその言を聽信し玉ふ義貞尊氏と同族なれども背て事を以て尊氏と隙を生ず尊氏固叛心あり義貞を憚りて毎にこれを除かんと謀る而して未だ發せず

二年秋北條時行の兵鎌倉を襲ふ朝廷尊氏を遣はして時行を討たしむ尊氏遂に府を鎌倉に開き朝命を拒み自ら征夷大將軍東國の管領と稱し上表して義貞を誅せんと請ふ義貞亦上奏して尊氏の罪を訴ふ朝廷義貞を大將軍節度使となし尊氏を討ぜしむ義貞兵六万七千余人を將として諸將と道を分つて京師を發す

義貞三河に至り直義と戰ふて之を破り勝に乘じて函根に至る尊氏來りて直義を援け大に竹の下に戰ふ義貞遂に敗績して京師に返る是に於て天下の武人一時蜂起して尊氏に應ず延元元年尊氏直義京師に逼る義貞乃ち將士を分ちて諸路を守らしめ自ら兵一万を帥ひて大渡を禦ぎ賊を卻く明日賊山崎を破り長驅して京師に向ふ義貞兵を引きて走り還り天皇を奉じて

新田義貞

延暦寺を保つたまへ北畠顯家入援す義貞乃ち顯家正成等と共に尊氏を襲ふ尊氏大に敗れ身を以て九州に逃る車駕京師に還幸し玉ふ義貞功を以て左近衛中將に任ぜらる

既にして山陰山陽諸國また起りて尊氏に應ず義貞に詔して山陰山陽十六國の軍事を管せしむ義貞赤松則村を播磨の白旗城に圍む城固くして拔けず延元元年五月尊氏直義と共に九州の兵を率ひ水陸三道より進む義貞退いてこれを兵庫に拒ぎ生田林を背にして戰ひ遂に賊を敗らる賊追ふこと急なり義貞自ら殿戰す馬矢に中りて僵る乃ち塚上に立ちて副馬を待つ賊兵競ひ至りて之を圍む義貞射て一人を斃す賊これが爲めに逡巡して近かず更に鏑を發めてこれを射る義貞二刀を揮ひて飛矢を截る小山田高家馳せ至り乘る所の馬を以てこれに授け步鬪して死す義貞潁川を免がるを得丹波路より京師に入る天皇また延暦寺に幸し玉ふ

尊氏東寺に據りて行在を犯す義貞戰ふてこれを敗り進んで東寺に迫る然れども衆寡敵せずして敗れ還る興福寺の僧徒官軍を援けしかば賊大に困

惑す公卿義貞を促がして進戰せしむ義貞乃ち諸將と日を刻して四面より攻めんと期す期に至りて義貞宗族四十三人と入て誓す天皇溫顏もて勞奬し玉ふ義貞拜謝して出づ乃ち兵を分ちて三とし火を縱ち轉鬪して進む賊兵これが爲めに披靡す遂に東寺に抵りて尊氏の營に薄る俄かにして賊兵後より奄ひ至る義貞馳突して出づ賊また雲合して之を圍むこと數重射て、その潁に中つ流血面を蔽ふ將士に令し馬首をして皆西せしめ意を決して赴く初め官軍の行在を發するや天皇親ら臨みて御する所の紅袴を解き寸斷して將士に預つ將士皆感激し笠號に綴りて出づ是に至りその兵八百殊死奮戰して圍を潰し義貞を救ふて去る是の日諸路の兵皆敗れ興福寺亦約に背きて至らず

尊氏伴り降り車駕京師に還幸せんことを請ふ義貞未だこれを知らず聞て大に驚き大館氏明をして往てこれを覘ひしむ乘輿將に發せんとする時に

新田義貞

り氏明泣て諫めて曰く『陛下何を以て反賊を眷愛し玉ひ義貞何の罪あつてこれを捨てさせ玉ふや伏て希くば義貞以上を召し死を御前に賜ふて而して後讒を絶せよ』と

既にして義貞義助等三千人を率ゐて至り陛下に列す天皇乃ち義貞に勅して宜へく『元弘以來卿一族の精忠朕豈にこれを忘れんや唯だ天未だ朕に禍せず逆賊倒天の勢あり由て權りに和を講じ以て時變を待んとすその事の泄るゝを恐るゝが故に未だ告げざりしのみ今皇太子を以て卿に附す卿これを視ること朕の如くし奉じて北國を經略し恢復を圖るべしと義貞感泣し明日皇太子及び尊良親王を奉じて越前に赴く時に延元元年十月なり

翌年足利高經高師泰等大兵を以て來り金崎城を攻む義貞能くこれを防ぐ既にして城中食盡き城陷る義貞杣山城を保つ此の時に方り義貞の次子義興上野に起り菊池武重肥後に起り兵勢頗る震ふ義貞の軍威亦漸く盛んなり乃ち進んで高經を足羽城に攻め七月燈明寺の畔に陣し兵を分遣してその七營を攻めしむ藤島の賊力戰し官軍殆んと卻く義貞怒り馬を易へ甲を擐じ騎を率て赴き救ふ高經亦歩卒三百を出して藤島を救はしむ義貞之に途に遇ふ敵楯に隱れて亂射す我兵楯を持たず僅かに身を以て義貞を蔽ふ中野宗昌義貞を目して曰く『千鈞の弩は鼠の爲めに機發せず』と義貞曰く『衆を弄てゝ獨り免るゝは吾が意にあらず』と馬に策ちて進む馬五矢を被りて淖中に顛る義貞起んとす飛矢あり額に中つ免るゝからざるを知りて終に自ら刎ねて死す年三十八宗昌及び結城親藤金持重興等屠腹してこれに殉し從者悉く殲く賊兵その屍を撿するに及び錦旗の詔書を得たりといふ以て義貞が朝廷を忘れざるを見るべし明治維新の後楠菊地北畠名和の諸氏と共に神號を贈られ國典を以てこれを祭祀しその精忠を追賞せらる

新田義興

新田義興は義貞の第二子なり幼名を德壽丸といふ母賤くして義貞の爲め

新田義興

を愛せられざるを以て幼よりして上野に居る延元二年鎮守府將軍源顯家將に鎌倉を攻めんとして軍を進め武藏の國府に至る義興亦兵三万を起して之れに應ず然れども顯家の儒し遲留することわらんを計り己が軍を以て直に鎌倉を取らんとす既にして顯家の軍至る遂に兵を合し攻めて鎌倉を拔き引きて興に俱に西上す

明年春青野の原に戰ひて上杉憲顯を破る顯家戰死するに及びてその弟顯信に從ひて男山に據る官軍敗績し奔りて吉野に詣る天皇延見しその才器を嘉みし玉ひて宣わく『父の家を興すべし』と沒前に加冠し今の名を賜ひ左兵衛佐を授け命じて北條時行と義良親王を助け往きて東國を略せしむ海上暴風に遇ひ諸軍相失す義興の船漂ひて武藏の石濱に到る仍て東國に匿る正平七年春弟義宗從弟義治と兵を起して鎌倉を攻む尊氏基氏を留めて鎌倉を守らしめ親ら兵を率ひて金井原に逆戰す官軍擊て尊氏を走らす義宗追擊す義興義治と白旗の一隊將に退かんとするを望みて尊氏とおし亦て

れを追ふたま〳〵降る者相屬し士卒北ぐるを追ひ爭ひ進む左右僅かに三百人伏兵あり四方より起りて之を圍む二人斬ら力戰す義興三創を被り義治は刀折れ更に薙刀を揮ひて圍ふ刀鋸齒の如し士卒死する者百余人僅かに圍を脫して免がれ義宗と相失す義興曰く我兵殘斃去らんと欲するも得べからず如かじ直ちに鎌倉を襲ひ基氏と決せんと即夜關戶を過ぐたまたま石堂義房三浦高遠等數千を率ひてきたり降る義興大に喜び相率ひて神奈川に至り敵の備へあるを知りてこれを襲ふ義興馳せて敵中に入り手づから三騎を斬る執る所の槍索斷れて地に墜る較に伏して結ぶ敵兵馳せ至りて亂擊す義興動かず敵大に異みて去る

已にして義治二百人を率ゐて敵中南定繼と戰てこれを破る基氏出で走る義興義治議して將に死守せんとす或曰く『宜しく且らく遁匿して京師の消息を聞き北國の諸將と約して再擧を圖るべし』と義興義治これに從ひ乃ち走りて國府津山に入り川村城に據る尊氏兵を率ゐて來り攻む乃ち城を棄

て、走る後義宗等と越後を保つ武藏上野の豪族書を致し奉じて將と爲んと請ふ連名盟約して二心あきを誓ふ義興義治疑ひて應ぜざりしが義興奇功を立んと欲し獨り百余人を從へて兩州の間を往來し頗る將士を崇奉せらる某氏及び畠山國清兵を遣はして之を襲ふ義興已に亡げ匿る敵これを路に要す義興數騎と圍を突きて免れ去るその往來出沒測られず國清大よれを忠ふ

初め武藏野の役に竹澤良衡といふ者あり義興の部下に在りしが後ち義詮に降る是に至り國清之れに唆かすに利を以てして義興を圖らしむ良衡詐りて罪を負ひ邑を奪れるゝ爲ねして人をして懇懃を通せしむ義興疑て見ず良衡美女少將を京師に迎へ養ひて己が子と爲し盛飾して進む義興これを愛す良衡因て人をして屢〻忠誠二あきを道はしめ遂に義興に見ゆることを得鞍馬鎧各三ツを獻じ從士に宴飲して各器械衣服を與へ義興益すこれを信じ密謀悉く之と俱にすたゞ〳〵九月十三日に値ふ良衡兵を置し義

興を邀へてこれを害せんと圖る義興將に赴かんとす會〻少將書を贈り告ぐるに因夢を以てして之れを止む家臣井伊直秀亦諫めて行くこと勿らしむ義興疾と稱して往かず良衡少將の謀を漏すことを疑ひてこれを殺す義興知らずして數〻書問を通ず良衡詐りて彼れ疾に罹ると答へて報ぜず人を遣はし國清に言はしめて曰く『審かに義興の所在を知るを得たり江戸高重をして來て俱に事を濟さしめよ』と高重は良衡の義兄弟あり國清因て又高重の食邑を奪ひ更に守吏を置く高重これを逐ひ城を築き兵を聚め陽りて叛する狀をなし良衡に因て義興に通じて曰く『臣故あくして邑を奪はれ身を容るゝ所なしこれが怨を報ぜんと欲するも軍に司命なければ士卒附かず願くば公を奉じて大將となさん臣が族鎌倉に在る者亦數千人率ゐて以て相摸を定め八州を徇へば天下定むるに足らず』と義興これを信じ將に鎌倉に赴かんとす良衡高重等曰く『多く兵士を從へば恐らくは人の爲めに怪しまれん』と義興これに從ひ十月士卒をして先づ發せしめ僅かに十余人と

新田義興

曉に乘じて鎌倉に適く良衡高重預じめ舟を鑿りこれに柄して矢口渡に艤し兵を岸側に伏す義興中流に至る舟人柄を抽て遁れ去り舟將に沈まんとす伏兵並に起り箭を敵きて閧笑す義興怒り罵りて曰く『咄大不道人の爲めに欺むかる七たび生れて必ず汝を讎せん』と途に世良田右馬助井伊直秀大島周防守由良兵庫助由良新左衛門と並び自盡す後ち高重矢口渡を渡り舟中流に至る雷雨俄かに至り怒濤大に起り舟覆りて悉く溺死す又矢口渡に怪異多し土人因て祀を建てこれを祀る号して新田大明神といふ

新田義宗

新田義宗は左中將義貞の第三子なり兄義顯卒せしかば立て嗣となる時に六歲武藏守左兵衛佐に任じ昇殿を聽され後ち左近衛少將に拜せらる兄義興脇屋義治と久しく東國に匿れて敵の隙を窺ふ

正平七年足利義詮欵を吉野に送る天皇陽いりてこれを許し玉ひ由良信阿

を遣はし義宗に敕して宜へく『朝廷の講和は實に一時の權謀なり宜しく時に及びて兵を起し賊徒を討滅して宸憂を除くべし』と是に於て牒を移して義旗を招集し兵八百を率ゐ出でゝ西上野武藏に至る足利尊氏逆へて金井原に戰ふ敵將狸庭氏直の部下六千皆な少壯にして兜に梅花を挿む我軍兒玉黨七千余人皆團扇を畫て旗號と爲す義宗曰く『扇に風あり以て花を散らす可し』と遣りてこれを擊たしむ氏直果して敗る敵兵隨ひ潰へて制止すべからず義宗乃ち騎五百を提げ挺前して之れを追ひ尊氏の旗幟を望みて馳すること數里石濱に至り幾んとこれを獲んとすその左右二十余人力戰して死す尊氏賴て遁れ去ることを得兵を斂めて前岸を守る義宗顧みれば日已に暮れて後軍繼がず切齒して返り金井原に至る義興義治と相失す衆議して謂はく『我軍に寡少なり恐らくは久く留り難からん請ふ暫く乘じて笛吹嶺に退き越後信濃の兵を徵して再舉を圖らん』と義宗これに從ふ兵士を集ること二万人宗良親王を奉じて元帥と爲す

新田義宗

新田義宗

時ゝ義興義治襲ひて鎌倉を取りてこれに據る尊氏先づ來り笛吹嶺を攻む義宗諸軍を將ひ迎へて小手差原ゝ擊ち戰利あらずして卻く日已ゝ暮る義宗敵營を望み見るゝ炬火五六里ゝ亘る而して官軍の炬火落々曉星の如し左右ゝ謂ひて曰く『世日一敗するとも安んぞ是の如きゝ至らん此れ必ず逃亡する者あらんと即ち關を設けて之れを防ぐ又前强敵ゝ逼り後鄕土ゝ近かければ士卒或ゝ大將內願を懷くと謂ゝん』と因て自から甲を脫して退かざるを示す軍中稍々定まる夜半他軍の酣戰ゝ赴く者あり炬火紿釋として路を照らす上杉憲顯これを視て先づ逃る義宗獨り留ることを得ず兵を引て越後ゝ走る

天皇親ら軍を御し京師を圖らんとし玉ふゝ及び兒島高德を遣ゝし義宗等に命じ來り會せしむ義宗兵七千ゝ將として桃井直常吉良滿貞等と並びゝ發す未だ至らざるゝ官軍潰退す義宗等亦兵を引き還る後ち義興義治と攻めて越後の半を取り城を築きて此ゝ居る二十三年義治と兵を起して上杉憲將等と戰ひ克たずして之れゝ死す

脇屋義助

脇屋義助ゝ次郎と稱す義貞の弟なり北條高時の兵を發して義貞を擊つや衆皆拒計を持して紛紜一ならず義助進みて曰く『北條氏の命を擅ゝ奉ずる百余年兵盛んゝ人服す固より我が敵ゝあらず縱ひ今よく拒ぐとも久きを持すべからず遂ゝ遁亡銷散して所在ゝ究死せん然らば世人新田氏ゝ坐おがら鎌倉の使を殺して顯誅を被むると謂ゝん恥づべきの甚しきゝ非ず や承くる所の綸旨ゝ何の時ゝ用ふる所ぞ但當さゝ兵を舉げて義を唱へ出でゝ郡縣を徇ふべし衆附けば進みて鎌倉ゝ向ゝん附かざれば死せんのみ衆その言ゝ從ひ遂ゝ功を濟すことを得たり因て兵庫助となる兄義貞と京師ゝ入りて武者所となり駿河の守護を領す義貞の尊氏を討つとき義助別ゝ尊良親王を奉じ兵七千ゝ將として尊氏と竹の下ゝ戰ふ前鋒利を失ひ敵

脇屋義助

勝に乘じて直に中堅を衝く義助兵を進めて之れに當る大友貞載鹽谷高貞出て敵に降り敵勢大に振ふ義助支ふる能はず親王を奉じて退走し遂に京師に還る兄義貞に從ひ諸將と尊氏を敗り尊氏遂に鎮西に奔る功を以て右衛門佐に拜し昇殿を許さる

又義貞に從つて赤松則村を白旗城に攻め久しふして拔けず義助諫めて曰く『嚮に北條氏天下の兵を擧げて專ら金剛山を攻め遂に海內の土崩を致す此れ鑑むべきあり今兵を小城の下に屯む我は糧竭きて彼は氣倍せん且つ尊氏既に九州を席卷す銳に乘じて東に向へば進退俱に難からん宜しく軍を分ち攻めて船坂を取り以て山陽の路を通じ中國の兵を收めて先づ彼の至らざるに直に筑紫を掩ふべし』と義貞之に從ひ則ち義助に二万を附し往て舟坂を攻めしむ然れども山險にして守備殿あり仰て日を送るたゞ〳〵兒島高徳兵を熊山に揚げ期を刻し夾み攻めんと約す義助終に船坂を攻めて之れを拔き又三石城を攻む尊氏直義水陸より東上す義貞乃ち義助を招き

俱に與に還りて兵庫に拒ぐ軍敗れ車駕再び延曆寺に幸す義助東坂を守り屢〻討て敵を卻く

義貞の北行するや義助をして杣山城に據り兵を招きて後援を爲さしむ平泉寺の僧徒三峯に據りて官軍に應じ將領を置かんと請ふ因て義助を遣はし往てその衆を統べしむ義助將士百余人を從へて營城を鯖江に視る足利高經の將細川某等覘ひてこれを知り兵五百を以て掩ひ至りてこれを圍む義助奮擊す敵軍水を濟りて却く諸將これを追はんと欲す義助聽かず火を擧げて救を諸營に求む是に於て官軍煙を望みて馳せ集り遂に進みて府城を取る

天皇義貞に詔して男山を救はしめ玉ふ義貞乃ち義助をして二万人を將として之に赴かしむ敦賀に至りて男山陷ると聞き乃ち引き還る是の歲義貞高經を足羽城に攻めて戰殘せしかば義助乃ち兵を引て石丸城に還る城中に在る者僅かに二千餘り乃ち走りて府に還る

脇屋義助

明年秋諸軍を召集して足羽を取らんと計り畑時能等をして敵壘を拔かしめ自から兵三千を率ゐて敵を攻むること三日夜間より壘十七を下し將七人を擒へし卒五百人を斬り進んで足羽に迫る高經懼れ城を火て遁る後村上天皇義助に詔して軍國の事を監せしめ玉ふ足利尊氏大兵を遣わして來り攻む義助敗れて美濃に走り根尾城を保ちしが土岐頼遠の爲めに攻め破られ衆七十三人と微服して尾張の熱田に往き藤原昌能に依りて渡津碕城に留ること十余日稍く散亡を集めて潛かに吉野に詣る天皇爲めに涙を掩ひて勞奬し玉へり翌日一級を加へ刑部卿に拜す

興國元年春伊豫の人兵を起して統帥を奏請せしかば廷議義助をして往かしむ西國の軍事い悉くその節制に出づ緣道の官軍多く戰艦資糧器械を具へ送りて今浦に至る大館明氏土居得能氏等大に勢援を得官軍また拔ふ敵風を望み十餘城を弄てゝ遯る義助諸軍沮喪し四國相尋て陷沒したり入りて國府に居りしが五月病みて卒す

脇屋義治

脇屋義治い刑部卿義助の子なり每に義助に軍陣の間に從ふ從五位上に叙し左衛門佐に任ぜられ式部大輔となる竹の下の戰に年甫めて十三從者三人と敵中に陷り髮を被り笠號を撤し敵をして辨識する能いざらしむ義助騎三百を引て深く入りてこれを覓む敵衆避易す義治これを望み僞りて返戰する爲ねして曰く『諸人何ぞ怯あると馬を躍らして義助の軍に赴く敵兵二人以て吾軍と爲して從ひ馳す義治從兵に目してこれを斫らしむ遂に遁れ還ることを得たり

明年瓜生保及び弟僧義鑑義治を奉じて兵を集め金崎城の後援を爲し擊ちて足利高經の新善光寺城を取る是に由て威名稍く振ふ郡縣贈遺相繼ぎ日々宴飲を設く而るに義治鬱々として樂まざるの色あり義鑑これを問ふ義治悄然として答へて曰く『向きに敵に克ちしい殊に欣ぶべし然れども皇太

脇屋義治

子及び我家の大人諸宗族い久しく敵の圍中に在りて苦戰し糧食盡く常に これを想へば宴に臨むも樂しからずと義鑑感泣して起つ宇都宮泰藤小野寺將氏壁後に在りこれを聞て曰く『此の子い丈夫の器あり何ぞ扶翼してその懷ふ所を濟さゞらんや』と保等因て兵を會して金崎を救ふ道に敵の爲めに敗られて事就らず義助卒し義治上野に屏居す

興國六年兒島高德備前に起り義治を請ふて大將軍と爲し潛かに兵を引て京師に入り尊氏を襲はんと圖りしが事覺れ義治高德亡げて信濃に匿る後ち從兄新田義興及び義宗と尊氏を金井原に擊ち遂こ義興と襲ひて鎌倉を取る居ること半歲尊氏大兵を引て還ると聞き走りて河村城を保つ後ち義宗と越後に居る正平二十三年義宗と兵を起して克たず出羽に走り終る所を知らず

新田義陸

新田義陸は脇屋左衛門佐義治の子なり(一に義則に作る)初の名を二郎といふ建德三年正五位下に叙し相摸守に任ず義治伊豫に赴く後ち猶ほ留つて新田に居たり天授元年十一月義陸雪を凌ぎて奥州に赴き伊達行朝田村清包に倚賴し兵を起さんと欲す行朝等又信夫の堂を促がして荐りに兵を募る二年正月義陸及び行朝清包の黨軍を相馬に出す相馬顯胤小田治久兵を率ゐて御越嶺に拒ぎ戰ふ死傷相當るその夜義陸自から兵二万を率ゐ治久の陣を襲ふ顯胤潰へ走る義陸顯胤を高志城に襲ふ二月伊達信夫の黨と相馬を發して白川領を侵略す田村清包後留とゐり高志山に陣す結城親朝兵一万余を率ゐて白川を發し小見原に屯して禦ぎ備ふ義陸及伊達宗朝等の兵一千余羽根備中守を歌姫城に攻てこれを拔き備中守を獲たり十四日黎明結城の兵急に義陸の營を襲ふ事不意に發し士卒周章す敵兵機を得て競ひ擊つ義陸兵を千堂森に伏せ急に起りてこれを擊つ遂に戰に克ち猶ほ進みて白川に陣すこの時飛檄至りて南部下山の二氏仲達を襲ふと

新田義陸

報ず又或謂ふ『小田佐竹等大軍を起して來る』と是を以て義陸故の國司が保つ所の靈山城を修す一井左京亮、堀口直元、世良田滿氏、島山彈正少弼、羽河原藏人田中兵庫助、舟田長門守等越後上野より來會して之れに據る

三月義陸及び信夫重信等兵三千を率ゐ相馬顯胤と鳥鵜嶺に戰ふ顯胤騎兵五千を率ゐ間道を經廻して來り擊つ義陸鉢岡に戰ひて敗る

四年二月義陸信夫重信と共に兵三千余を率ゐて白川に入り粟谷左近入道を攻めてこれを獲たり翌年三月伊達行朝兵六千余を率ゐ來りて靈山城に會す義陸その兵を併せて伊東洲濱を臨へ三日市棚倉を經て相馬に入る相馬顯胤騎兵七千余を發してこれを室原に邀ふ相馬の部下長谷三郎左衛門仮降す遂に高志山を襲ふてこれを拔き將に白川に入らんとす足利氏滿師を率ゐ來り相馬を救ふと聞き軍を收めて還る

九月義陸桃井治部大輔大館氏忠等をして白川の踏瑞城を攻めしめて之れを陷し進みて香草城を焚く六年二月從四位下に叙し右近衛少將に任じ陸

奥出羽の管領に補し勅して朝敵を征伐せしむ弘治元年三月結城親朝蘆名眞盛と共に騎兵二万余を併せて信夫郡を侵略す義陸伊達宗朝と共に出で淺香山に備ふ十七日の夜親朝靈山城の虛あるを狙ひ兵を潛めてこれを攻む義陸兵を率ゐて仮り營を仮原野に布き分ちて三隊とおし親朝と接戰す義陸唐橋經氏等の兵一千余を藪陰に伏せその戰酣なるに及び縱ちてこれを擊たしむ親朝敗走して死傷頗る多し

二年四月相馬顯胤小田佐竹と共に又また高志城を修築す義陸及び信夫重信田村清包兵を率ゐて將に趣き擊んとす小田佐竹の兵出て、遮り戰ふ義陸孤軍にして遂に克つ能はずして罷む

元中三年南部下山欵を送りて仮降す是に於て義陸新田直方伊達行朝と共に謀畧を廻らし將に鎌倉を襲はんとし若林九郎入道を上野に遣はす四年二月伊達信夫下山田村岩城忠將相馬行胤等靈山城に會す騎兵都て二万七千余義陸貞方を推して將帥と爲し軍を白川に出す結城親朝これを聞き關

新田義貞

を杜ち嶮を斷ちて守備を嚴にす

三月進みて白川關を攻め接戰す四日未だ勝敗を決せず或人議して曰く『兵を頒ちて結城を壓し師を鎌倉に發せん』と而して蘆名盛貞の應援すると聞き南部下山をして結城に備へしめ師を反して下刀禰原に陣し蘆名の援兵と戰ふこと累日たま〳〵陣營多く邪疾を患ふ義貞行朝皆疾みて前むこと能はずして師を還へす

五年春義貞疾癒ゆ會議して將に師を鎌倉に發せんとせしに結城蘆名等去年の敗を雪がんとして出で安達原に屯す世良田滿氏伊達師宗等の兵七千伊達宗朝又兵二千余を率ゐて來り俱に親朝の兵と戰ひてこれに克ち飯降する者多し三月十一日義貞眞方の爲めに師を督して進み白川に到る而して小田佐竹等軍を久保田に出すと聞き義貞兵を率ゐてこれと戰ひ瞎を傷け馬より墜つ敵機に乘じて掩擊し我軍敗績す義貞眞力靈山城に在りて恢復を謀ると雖も神器北朝に傳はり南朝の皇統分散し諸州の衆心二を懷き南部下山岩城の黨皆離散す唯だ伊達信夫田村のみ猶ほ志を變ぜずして俱に興復を議す

應永三年二月小山若犬丸旗を古河に擧げて官軍に應ず足利氏滿兵を遣わして義貞及び若犬丸を難ち軍敗れて卻き走る四月田村清包義貞及び若犬丸を援すけて軍を白川に出す氏滿師を率ゐて發すると聞き清包等皆散走す

七年正月伊良親王居を上野に徙し遠人駿人多く從屬す富士白砂邊に抵りて敵と戰ひ利あらずして走る十年四月義貞相摸國に潛匿して木賀秀澄の家に隱る秀澄志を變じてこれを鎌倉に訴ふ足利滿泉藤田重基を遣わし秀澄をして義貞を欺むきこれを底倉の溫泉に誘ひ重基をして義貞を殺さしむ

宗良親王

宗良親王

宗良親王

宗良親王は後醍醐帝の第二子なり十余歳にして僧となり尊澄と稱す帝の北條氏を滅ぼさんと欲し玉ふや乃ち尊澄尊雲を天台座主とし俊基成輔等に密旨を授け叡山奈良の僧徒を延き陰かに謀策せり已にして事泄れ俊基等執へられ帝は笠置に幸し玉ふ

元弘元年北條氏兵を叡山に移し帝を索む親王尊雲と僧兵を糾聚し佐々木時信と辛崎濱に戰てこれを走らせその將海東を獲たり既にして衆離散し親王支ふる能はず尊雲と殘黨を率ゐて石山に走る親王途にして賊の爲に執へられ長井高廣の家に拘せらる

高時滅び帝京師に還幸し玉ふや親王亦京師に還へれり尊氏反して京師を犯し帝延曆寺に幸し玉ふとき親王よく衆徒を奬勵せしを以て一品に叙す延元元年十月尊氏伴りて降を乞ふ帝權りにこれを聽して京師に還幸し玉ふ親王遠江に走り兵を井伊城に起す三年春北畠顯家の奥州の兵を率ゐて入援するや親王兵を以て之に合して奈良に入り將に京師を攻めんとす既

して顯家戰沒するを以て吉野に走る

七月親王義良親王及び北畠親房結城宗廣等と東國を經營せんと欲し伊勢に至り颶風に遇ひ親王の船漂ひて遠州に至る乃ち井伊城に入るこの時養髮して宗良と改名し上野親王或は信濃宮と稱す是の時に當り陸奥親王駿河安倍城に在りて宗良と相連絡して四方の義士を召集し將に鎌倉を取らんとす鎌倉動搖して東國の官軍また振ふ

興國元年二月高師泰仁木義長等力戰して井伊城を陷す既にして親王餘衆を收めてまた井伊城に據りしが師泰の敗る所となり親王吉野に走らんとす路梗れて達すべからず遂に越後に赴き北國の軍を督し上杉憲顯を伐ち軍敗れて信濃に走る四年遠江に至りしに國人背きて納れずたまたま三河の人足助重春奉ずして兵を起さんとす宗良心決せず賦を贈りてこれを辭す遂に駿河に赴く狩野介貞長厚くこれを遇す然れども雄心禁ぜず信州に往て兵を起さんとし大河原に到る香坂高宗等兵を率ゐて奉迎す此の冬北國

宗良親王

の兵士南朝に心を通ずるものあり親王を奉じて兵を起さんとす親王乃ち招きに應じて潛かに越中に入るこの時關城破れて親房吉野に走り義助已に死して東北の官軍振はず故に親王志を達するを得ず

興國四年親王信州に還り諏訪に居る五年また大河原山の奥に匿る翌年越中に移り義を唱へしが應ずるものなく復た大河原に還る時に官軍益す衰微し親王遁世せんとす帝これを聞き『郭公そなたの空にかよふあらばやよやまてとてことつてましを』と御製して賜り以てその志を勵し玉ふ帝男山に幸し親房軍を總べ由良信阿をして密旨を奉じ東國に赴き新田の族をして兵を起して尊氏を討たしむ親王亦兵を信濃に起す既にして宗良を征夷大將軍に任じ東國の軍馬を總べ尊氏を討たしむ

二月二十日軍を率ゐ義宗義興義治に會し進んで武藏野に陣し兵を勒し士を勵まし歌を作て曰く「君がため世の爲め何かをしからんすてゝかひある命ありせば」既にして兩軍金井の原に戰ひ賊將櫻庭氏直を走らす尊氏狼狽して逸走し殆んど尊氏を獲たまゝ義宗義興義治と相失し退て笛吹嶺を保つ宗良親王大井田氏經上杉憲顯等二万余人を率ゐてこれに會しその元帥となる

この時義興義治は襲ふて鎌倉を取り之れに據る尊氏先づ來り笛吹を攻む親王諸軍を督して小手背の原に逆擊し利あらずして卻く日暮れ我兵敵軍の炬火數里に亘るを見て逃亡する者多く上杉憲顯亦逃る義宗獨り留るを得ず越後に走り親王は信濃に走る

時に義詮の勢ひまた振ひ親房軍敗れて男山に還り義詮行在を犯すこと急なり親房密使を四方に馳せ諸國の義軍を起し男山を援いしむ親王乃ち神家滋野友野上杉仁科禰津等の族を率ゐて五月十一日信濃を發す既にして男山陷り帝南幸し玉ひしと聞き兵を引きて還る

正平十年兵を信濃に起す諏訪祀某仁科某これに應ず蓋し北國及び甲駿遠に往來して賊と爭ひしあらむ十四年畠山國清行在を犯さんとす帝親王に

宗良親王

詔し兵を發し來援せしむ親王詔を受け入援せんとせしが雪ゑ沮まれて軍を出す能はず後熊山帝讓りを受け玉ふゑ及び南朝益す衰ふ宗良親王大河原城ゑ在り滋野香坂木曾上杉の諸族を率ゐて賊軍と戰ふ文中元年遂ゑ大河原を發し吉野ゑ詣る既ゑして親王南朝の益す衰微するを見志を勵まし信州ゑ行く然れども此の時東北の官軍殆んど滅盡す天授六年信濃大河原山ゑ義兵を擧げしが應ずるものなく獨り香坂高宗のみ忠を盡して親王を慰藉するのみ親王已むを得ず信濃を去て河内ゑ至り山田の庄ゑ寓す弘和中伊井城ゑ薨す年七十或いいふ新田義陸の宗族戰沒せしとき親王亦山中ゑ自刃して薨ぜりと明治四年井伊谷村に社殿を造營して親王を祭れり

毛利元就

毛利元就い幼名を松壽といふ弘元の第二子ありその先い大江廣元より出づ元就幼ゑして器度ありその保母曾て抱きて川を渡り誤り顛て溺れ恐惶して罪を謝す元就從容として曰く『道を行て顛くい常あり何ぞ必しも傷まん』と又曾て嚴島の祠ゑ詣ず仮て從士ゑ問ふて曰く『汝等何をか祈』る從士曰く『郎君の安寧ゑ主たるを祈る』曰く『汝愚何ぞ我が天下ゑ主たるを願いざる矣れ天下ゑ主たるを願ふ者い一方ゑ主たり一方ゑ主たるを願ふ者い一國ゑ主たり今一國ゑ主たるを願ふ成す所知るべきのみ』聞く者これを奇とす元就の兄興元家を嗣ぐ元就出で多治比氏ゑ養いる永正元年元服を加へ元就と名く少輔次郎と稱し猿掛城ゑ居る後ち興元の嗣嗣絶ゆるゑ及びて宗家を嗣ぐ天文二年從五位下ゑ叙し右馬頭ゑ任ぜらる毛利氏初め大内氏ゑ屬せしが後ち欵を尼子氏ゑ通ず尼子晴久元就を遇する頗る亡狀あり元就以爲らく我家世々大内氏ゑ屬して親交年あり中途尼子氏ゑ通ぜるい止だ家國を保たんとするのみ而して彼れ却て屢ば我が家を覆さんとす是れ家國を保つゑ足らず寧ろ舊ゑ依て大内氏に屬するに如かず』と因て人を遣いして大内氏と舊盟を温む晴久これを聞き大ゑ憤激し來り吉田を攻む元就

屢〻奇計を以て敵を破る晴久竟に三柵を作て吉田に迫る元就の兵僅か一千余人に過ぎず而して敵い五万に餘れり既にして藝備の諸將及び大内氏の將陶晴賢等來り援け竟に晴久を破る晴久夜に乘じて遁る

天文十一年義隆兵三萬五千を發して尼子氏を討元就前鋒たり義隆の兵敗れ元就殿して退かんとす晴久追こと急あり我軍大に敗れ元就身を以て免る是より先大内義隆從二位に叙せらる始天文三年後柏原天皇位に即せ玉ふや國用缺乏して大禮を行ふを得ず義隆資を献じ功を以て寵異あり天文二十年八月その老臣陶晴賢反し義隆を攻義隆自殺す義隆の自殺するや書を元就に遣いして曰く『吾れ不運にして兇賊に亡ぼされ恨を呑んで地に入る卿に あらずんゞ誰れか我が爲めに仇を復せんや』元就書を覽流涕して曰く『吾れ義隆の眷遇を受く依嘱あしと雖も尚ほ仇を復せんとす況んや之れあるをや』と宿臣を會して討伐を議す諸將皆彼れの兇威大なるを以て姑らく從て私かに力を蓄へんといふ元就これに從ふ

初め毛利氏の將井上元兼豪族たるを以て動もすれゞ合に從いず又心を陶氏に屬す元就これを憎み計を設けて族誅し因て諸將を會して晴賢を討せんと議す子隆景進んで曰く『宜しく之を天子に請ひ大義に仗てこれを討すべし則ち人心の向ふ所克たざるおけん』元就曰く『善し』乃ち上書して曰く『太宰大貳大内義隆父祖の遺業を受けて心を皇室に存す而して賊臣晴賢に弑せらる臣元就微力を奮ひ誅伐を圖りて未だ成らず伏して願くゞ晴賢を討ずる一行詔を得徒屬を糾合して以て西陲を靖んせん』廷議これを許す元就詔を得て感喜し書を遠近に移す津和の城主吉見某首として之に應ず晴賢怒てこれを攻む元就援兵を遣いし陶氏の兵と戰いしむ晴賢遂に大兵を發して來る元就これを狹隘の地に邀めて一擊にこれを殲さんと欲し弘治元年五月嚴島の有浦に城く諸宿將多く諫むれども聽かず六月城成る元就故らに聲言して曰く『悔らくゞ老將の言を聽かざりしを』と九月晴賢自ら兵二万戰艦千餘艘を率ひて岩國に至り先づ嚴島を攻めんとすその將弘中隆

毛利元就

包諫めて曰く『元就嚴島に城けるを悔ひ何ぞ敢て宣言せんや而して彼れ宣言す必ず詭計あらん』と晴賢決せず元就書を貽りて晴賢の罪惡を數へ筆を極めてこれを誹る晴賢大に怒り竟に嚴島を攻むるに決し十月塔の岡に次し民舍を燒て陣を設く元就自から精兵三千余人を以て發し晴賢と水を隔て陣す而して元就老幼輜重を返す陶氏以爲らく元就力敵せず竟に兵を收めて退くありと是に於て元就軍中に令し兵士人毎に二條の布を以て袖を約し且つ一日の糧を佩ばしめ暗號を約し日暮に船に乘らしむ偶ま大風雨あり士卒震悚す元就曰く『是れ天我れを佑くるあり悉く船中の篝火を滅せしめ止だ一燈を牙船に点じ浪を破て進み渡り畢て船を返して必死を示す竟に廻て塔の岡の背に出づ時に十月晦日あり天明に及び元就命じて鼓螺を急にし高きに乘じ吶喊して下り直ちに晴賢の本營を衝く彼の兵大に驚き爭ふて本營に集り喧咽して自ら相殺す元就大に呼んで諸將を勵ます諸將柵を破つて入り大に敵兵を敗る晴賢喝して逃るゝものを遏むれども

兵衆皆船を爭ふて遁れ溺死數千人に及ぶ晴賢竟に自殺す元就その首を獲鞭を揮て指して曰く『弑逆の報斯の如し天命如何ぞや』諸軍に令して凱歌を揚げしむ是に於て元就の威關西に振ふ戰國の世天子將軍あるを知らざりし時に當つて元就よく大義名分を知り詔旨を請ふて陶賊を討す世その尊王の志を稱す

永錄三年正月正親町天皇即位の禮を行はせ玉ふ是より先き弘治三年天皇踐祚し玉へりと雖も天下兵亂久しく皇威衰弊して財用給せず故に未だ即位の大禮を行はせ玉はざりしあり是に至て元就遙かに故事を修め穀一千石を奉る由て大禮を擧行するを得たり天皇大に感賞し玉ひ詔して元就を大膳大夫に任じ菊桐章を賜ふ二月陸奥守に遷り從四位下に叙す將軍義輝錦袍を賜ひ尋て相伴衆に列す

元就一擧して陶氏を亡ぼすや勢に乘じ尼子氏を壓し白鹿城を屠り進みて富田城を攻む敵兵全力を以て堅く守り降らず對抗七年の久しきに亘る而

織田信長

して城中粗食盡き終に軍門に降る元就既に尼子氏を亡し遂に山陰山陽の十三州を併有し元春に命じて山陰を掌らしめ隆景をして山陽を管せしめ竟に二將をして西海南海を侵さしむ元龜元年元就病みて郡山城に卒す時に年七十五詔して正三位を贈らる元就夙に皇室を尊崇し曾て天皇の即位の料を献じ陶族を討ずるや亦賞に天子の詔勅を待てり心を皇室に存すること深しといふべし

織田信長

織田信長は信秀の子にありその先平重盛より出づ信秀始め斯波氏の重臣たりしが竟に自立して尾張の一隅に據る頗る武名あり信長は天文三年を以て生る幼名を吉法師といふ信秀自ら古渡に居り別に名古屋に城きて吉法師を居らしむ幼にして豪蕩武を好む常に近侍を會し竹槍を執て戰鬪の狀をおさしむ曰く『槍は長きに利あり』と二丈の槍を造る信秀卒するの後爲す

兵事を講じ隣國に警備す

時に今川義元駿河遠江三河を定め遂に尾張を取らんと欲し自ら三國の兵四万五千を將ゐて來り攻む鷲津丸根の城塞敵の衝路に當れり守將大學卓宗急を信長に告げて曰く『義元昨日沓懸に至り今夜將に粗を大高に運び兩城を攻めんとす信長將士を召し謂て曰く『我れ赴き援けんと欲す何如林通勝曰く『敵衆四万にして我兵三千に過ぎず宜しくその來鋭を避け本城に據てこれを待つべし』信長曰く『不可あり吾れ天下の英雄を視るに專らその地利を恃みて以て時機を失し自ら滅亡を取るもの寡あしと爲さず先君言へすや隣國の來り犯すに當り苟も遲疑あらば我が將士志を緩ぜん宜しく速かに出て迎へ戰ふべしと吾れ敢て先君の教に背かず明日將に一戰して勝敗を決せんのみ』と諸將敢て諫むるものなし信長因て酒を命じ共に飲む酒酣にして天明く信長自ら起て舞ひ古謡を誦して曰く『人世五十年乃如夢興幻有生斯有死壯士將何恨』と舞ひ畢りて甲を被て馬に上り單騎鞭を舉げ

織田信長

織田信長

で出づ騎よく屬するもの十余人熱田祠に及ぶ頃千人を得たり自ら戰勝を祈り行々諸城の兵を收む兵凡そ三千騎東望すれば火雨城に起る將士逡巡す信長益すその馬に鞭て進む林通勝柴田勝家、池田信輝、毛利秀高馬を扣て諫めて曰く彼れ大衆新に勝つ寡兵を以て犯さば立ろに覆沒せん『信長聲を勵まして曰く』汝が雖我が言を聞け我れ安りに進んで敵を犯すものに非ず糧を大高に入れ終夜息まず今雨城を拔きその兵疲獘す而して義元我を侮り備を設けず吾れ是の時に乘じてその不意に出でば一戰して擒すべきあり』と『桑田出羽その計を贊す信長乃ち旗鼓を伏せ山に循て馳せて桶峽に至り義元の營を覗ふ馬より下りて接戰せんと欲す森可成曰く『衆寡敵せず宜しく突くべし』信長乃ち馬上に鎗を揮ひ衆に先ちて馳せ下る會に雷雨昏冥あり我軍皷噪營を斫て入る敵衆相蹂躪して出づる所を知らず服部小平太進で幕中に入り義元に薄る義元刀を拔てその膝を擊つ毛利秀高義元を刺しその首を斬て出づ駿河の軍大に崩る信長追擊してその精騎三千餘殺

を斬り義元の首を馬前に掲げて清洲に凱旋す是に於て信長の威名天下に震ふ

是より先き後小松天皇以降六帝の間大亂に際し供御の邑皆武人の占奪する所となる殊に御柏原後奈良兩帝の如きは踐祚の後即位の大禮を擧ぐること能はず本願寺の僧光兼及び大内義隆その費用を奉獻して僅かにその儀を成す是に至る帝室の式微實に此の時に極まれり時に正親町天皇信長の名を聞し召し密使を尾張に遣はし托するに天下の亂を平定するを以てし玉ふ信長乃ち沐浴して衣を更め出で勅使を拜し使者に謂て曰く『吾れ聞く天子は天下の君なりと宜しく我に代り臣職を盡すべし今反て使命を辱ふす恐懼何ぞ堪へん當さに天威に藉り兇徒を平げ以て報復を圖るべし』と因て自ら食を調して天使を饗し勅旨を以て部下の將士森可成、柴田勝家、丹羽長秀、木下秀吉、瀧川一益等に告げ以て西上の事を議す時に永祿三年なり

是より先き齋藤義龍その父道三を弑し子龍興に傳ふ龍興庸劣なり故に

織田信長

の將士信長に皈するもの多し信長途に襲ひて井口城を取り美濃を定め移りて之に居り井口を攻めて岐阜と稱す永錄十年帝また使を遣わし詔書及び戰袍一領を賜ふ信長感激して曰く『臣闕に至るの日當に服して以て賜を拜すべし』と時に足利義昭各所に流寓し終に信長に皈し托するに與復を以てす信長乃ち大に兵を師おて義昭と共に西上し近江に入りて先づ六角氏の軍を攻破し直に進みて京師に向ふ三好の黨これを聞き京師を棄てゝ走り山城摂津河内の諸城に據る信長乃ち柴田勝家を遣わして諸城を攻めしむ諸城主或ゝ降り或ゝ走り近畿略ぼ定まる

是より先き義榮既に薨ず詔して義昭を征夷大將軍に任じ信長を從五位下に叙す是に於て織田氏頓に強大となれり然れども武田上杉二氏のその背を窺ふあり故に信長意を傾けて武田氏に結べり

時に京師屢〻兵亂を經て宮闕大に壞る信長命じてこれを修治し供御の邑を奉ぜんと欲す然れども武人の占奪する所とならんことを恐れ米を京畿

の豪家に貸し毎月息を納て以て供御に充て且廷臣の家政を計畫し木下秀吉をして京師を鎮せしむ既にして義昭信長と隙あり武田上杉二氏と約し夾み擊ちて信長を除かんとす信長これを聞き兵を率ゐて義昭を圍み和を請じて皈る天正元年義昭また兵を舉ぐ信長直に京師に入り二條城を陷し義昭を逐ふ是に至りて足利氏終に亡び織田氏代りて京畿の政を行ふ

是より先き信長伊勢の北畠氏近江の六角氏を降し畿内の三好氏を滅し又屢〻近江の淺井長政越前の朝倉義景と戰ふ二氏連合して之れに抗し叡山の僧徒も亦これに與せしが後遂に二氏を滅し諸將に命じて叡山を燒かしめ僧徒婦女老壯とあく盡くこれを殺戮せり蓋し鎌倉幕府の時より僧徒暴横の弊稍く減耗すと雖も猶ほ叡山の僧徒ゝ依然として兵器を弄せしが此に至りてその弊全く止みたり

天正四年信長盛んに近江の安土に城き自ら移りてこれに居り以て上杉謙信に備へ子信忠をして岐阜に居らしめ以て武田勝頼に備ふ初め松永久秀

織田信長

三好の黨と隙ありて遂に信長に降りしが信長衆中に於てその弑逆を行ふを聞りしを以て意自ら安ぜず遂に志貴城に據て反す信長信忠を遣わして之れを討たしむ城陷り久秀遂に自殺す

信長近畿略ぼ定まるを以て山陽山陰を略せんと欲し秀吉に命じて西征せしむ時に上杉謙信卒し子景勝嗣ぐ信長これを聞き大に喜びその臣佐久間信盛前田利家佐々成政をして地を加賀能登越中に略せしめ遂に大舉して武田勝頼を攻む勝頼窮迫して天目山に自殺し武田氏亡ぶ乃ちその領地を以て有功の將士に分與し瀧川一益を關東の管領となし以て東北を圖らしめ遂に安土に皈る

是より先き秀吉播磨を平げ進みて但馬因幡等の諸城を下し備中に入りて高松城を圍む毛利輝元數万騎を師ゐて來り援く信長亦秀吉を援けんと欲し信忠と先づ進みて京師に入り本能寺に館す信長の臣に明智光秀と云ふ者あり事を以て深く信長を怨みその備へなきに乘じて急に本能寺を圍ひ

信長邸内に在りしが慌き起て曰く『反する者い誰ぞ』蘭丸をしてその旗幟を視せしむ曰く『明智光秀なり』と信長曰く『恨むらくい彼に先んぜらる』と弓を手にして出で親ら射て數人を斃す絶しこれを執て鬪ひ右肱を傷けらる乃ち火を縱つて自殺す年四十九蘭丸及び金森長則高橋寅松矢代勝助伴正林等百余人皆力戰して死す信忠亦害に遭へり時に天正十年なり信長常に心を帝室に留め大亂を平定するを以て志とす惜いかな中道にして此の奇禍に遭ひ數年の大業一片の烟となれり然れども後來豐臣氏その幕下に出で遂に國内を統一するに至りしい實に織田氏の功業に由るもの多しと謂ふべきなり

豐臣秀吉

豐臣秀吉い尾張愛知郡中邑の農民彌助の子なり幼字を日吉といふ八歲にして父を失ひ母と共に邑人に寄食す邑人これを厭ひ同里の筑阿彌の妻と

豐臣秀吉

豊臣秀吉

す日吉隨ひてその家に在りしが筑阿彌日吉をして僧とおらしめんと欲しこれを寺院に送れり日吉機敏よして僧事を學ぶを欲せず人の武事を談ずるを聞く毎に嘆じて曰く『僧い乞丐の徒のみ大丈夫亂世に生れ安ぞこれを學ぶを爲んや』と是に於て游嬉意に任せ故らに僧をして己を厭いしめ遂に寺を出づ筑阿彌また造いして人の奴となす到る處僅に數月にして去り二十歲の頃遠江の人松下之綱の奴となる之綱日吉に命じ尾張に至り織田氏が用ふる所の鎧を買いしむ因て金六兩を附して遣る日吉以爲らく『此の金を以て資裝と爲し良主を擇んで功名を立つべし大功い細瑾を顧みず吾れ他日志を得るを俟て松下氏に償いんのみ』と遂にその金を以て衣服を辨じ自ら姓名を造りて木下藤吉といふ以爲らく『今天下の豪傑信長に若く者なし』と乃ち信長の出るを伺ひ道路に跪き拜して仕を求む信長熟視して笑つて曰く『汝が面猿に似たりその心必ず捷おらん』と竟に收めて奴となす是に於り常に鞋を提げて從ひ奉仕甚だ勤む信長日にこれを親近し遂に進めて吏

と爲し諸事を處辨せしめしに皆その意に適す後信長藤吉に名を秀吉と命じ部將とす

信長の美濃を攻め京畿を平げ又伊勢を略し近江越前を討つや秀吉毎に謀計を參畫し强敵に當りて功あり秀吉金瓢を以て馬表となし一勝毎に一瓢を加ふ曰く『吾必ず積みて千に至らん』と因て千瓢と稱す織田氏の軍を出すや千瓢の馬表を望見して敵これを避く秀吉前後封を加へて二十二万石に至り長濱に居り氏を羽柴と更む

是の時に當り毛利輝元山陽山陰十余州に割據し浮田直家備前美作を以てこれに應ず兵力甚だ盛んなり信長秀吉を以て征西大將となし之れに當らしめ幾を賜ふて曰く『若し功成らば中國を以て汝に與へん汝また進んで九州を取るべし援兵は請ふに任せん』秀吉拜謝して曰く中國を取るい臣の方寸に在り願くい君中國を以て近臣の功あるものに與へよ臣い則ち勢に乘じて九州を平げその一歲の收入を賜いらば糧食を積み兵艦を造り海を渡

て朝鮮を討つべし請ふ朝鮮を以て臣に與へよ臣また朝鮮の兵を率ひて直に明に入り四百州を蕩平して三國を合一し以て君の威武を發揚すべし」信長笑て曰く汝また大言を發するかと秀吉遂に兵を率ゐて中國に下り進み直家を降し備中に入り高松城を圍み毛利氏と相持す

時に明智光秀信長を弑し京畿の政を行ふ秀吉報を聞て直に毛利氏と和し馳せて尼崎に至る此の時に當り織田氏の一族宿將光秀を憚り觀望して敢て發するものなし獨り秀吉馳せ至り使を光秀に遣はして山崎に會戰せんとす光秀兵一万六千を以て山崎に陣す秀吉兵を率ゐて至り天王山を指して曰く「勝敗の決彼の山に在りと急に兵を遣はして之れに據らしむ賊兵先づ登る我兵擊てこれを走らす既にして兩軍接戰す秀吉大にこれを敗り光秀を殺し余黨を誅す光秀事を起してより僅かに十三日にして亡ぶ秀吉乃ち信忠の幼子秀信を立つ是に於て秀吉の威名日に嫌んなり柴田勝家等これを忌み信孝と謀り兵を擧ぐ秀吉勝家の軍を賤ヶ岳に攻め信孝勝家皆自

殺し一益降る信孝の弟信雄亦兵を擧ぐ德川家康これを助け秀吉と共に小牧山に對し秀吉の別軍を長久手に敗る秀吉和を講じて兵を罷む次で秀吉長曾我部元親を降して四國を平げ又上杉景勝と和して北陸を定め秀吉竟に織田氏に代る乃ち大坂城を築きてこれに居る城の宏壯天下に冠たり遂に自ら請ふて關白となる天子新に姓を豐臣と賜ふ

是の時に當りて秀吉の威名天下に轟けり而して島津義久薩摩に據り北條氏政相模に據り共に豐臣氏に服せず秀吉朝命を以て義久の入朝を促せども義久從はず天正十五年秀吉越中尾張以西三十七國の兵二十余万を發し自ら將として九州を征し諸城を陷し進みて薩摩に迫る義久力屈し終に降り九州悉く平ぐ秀吉乃ち京師に帰る

秀吉第を內野に築き名を聚樂と命じ後陽成天皇の臨幸を奏請し文武百官を率ゐて扈從す遠近の人民出でゝ儀仗を觀る父老或ゐ流涕する者あり曰く「吾儕行幸の儀あるを聞くこと久し今親しくこれを觀るを得たり」と時に

豐臣秀吉

秀吉盛服して御坐の右に侍し悉く天下の侯伯を召して前に列せしむ諸官次を以て進み盟て曰く『皇室を奉戴し力を王事に竭して敢て或い怠るおけん皇家の邑或い敢て侵すおけん關白の令する所事大小とおく敢て或い奉ぜざるおけん』と明日諸侯伯を饗す車駕蹕を駐むること五日にして還御す秀吉京師の戶租を以て供御に奉ぜしその戶租を以て上皇の湯沐の邑とおし又近江高島郡を以て廷臣の采邑に充つ凡金帛珍貨の献前後算なし十七年五月また金銀各三十六万五千兩を文武百官に分つ

この時に當り全國の大半秀吉に服し而して關東の北條氏陸奥の伊達氏等從はず秀吉數〻これに入朝を諭せども命を奉ぜず遂に自ら大兵を率ゐて北條氏を攻め小田原城を圍む兵凡そ三十万人伊達政宗大に懼れ來りて降を乞ふ秀吉之を許し去りて國に就かしむ時に城重圍の中に在ること幾んど半歲氏政氏直力屈して遂に降る秀吉氏政をして自殺せしめ氏直を高野に放つ是に於て豐臣氏全く海内を統一せり秀吉乃ち關東八州を家康に賜ひ又蒲生氏郷を以て奥州の鎭將とおす曾て松下之綱に二万石を給し以て前日金を私せし報とおす

秀吉信長に嗣て皇室を尊崇し出征毎に必らず朝命を乞ふ夙に兵を出して海外の地を略せんと欲すその國内を統一するに及び宗義智等をして朝鮮王李昭に諭さしむ李昭從はず秀吉たま〻明主政を失ひ武備具はらずと聞き遂に意を決して明を征せんと欲し大に行營を肥前の名古耶に築き關白職を養子秀次に讓りて太閤と稱し出でゝ之に居り諸將に令して軍に會せしむ諸軍會する者五十万人その十五万を以て水陸九軍を編成し別に遊軍六万を置き先づ朝鮮を伐たしむ浮田秀家總督たり加藤清正、小西行長先鋒たり黑田長政、島津義弘、福島正則、小早川隆景、立花宗茂、毛利輝元等これに次ぐ

文祿元年四月兵艦海を蔽ふて渡る行長先進して釜山に達しその城を拔き慶尙道に向ふ諸軍相次で陸に上り進みて諸城を屠り遂に國都に入る朝鮮

豐臣秀吉

豊臣秀吉

王李昭出でゝ平壤に走る是に於て秀家自ら國都に居り諸將をして進取を圖らしむ清正は咸鏡道に行長は平安道に向ひ其他の諸將は各道を分ちて進む李昭急を明に告ぐ明主朱翊鈞大に驚き祖承訓史儒等をして平壤を援けしむ行長遂へ擊ちて大に之れを破り儒等を殺し承訓を走らせ遂に平壤を取る

清正の咸鏡道に入るや二王子咸鏡の北方に遁ると聞き轉戰長驅して朝鮮の極北に達し遂に二王子を擒にし咸鏡道を平ぐ是より先き承訓等の敗聞明に至る明主その驍將李如松をして朝鮮を救はしむ行長これと戰ひ敗れて國都に走る朝鮮の兵これを聞ひて所在並び起り以て明軍に應ず我諸將皆退きて國都に集まる獨り隆景宗茂等と退かずして曰く『我盡力を竭し國に報ゆるは固より今日にあり』と時に如松等の大軍勝に乘じて攻め來る隆景これを碧蹄驛に邀擊し大に明軍を破り北ぐるを追ひて之れを江に擠す江水これが爲めに流れず如松敗軍を聚めて退き畏怖して後南下せず

明人に沈惟敬と云ふ者あり人と爲り詐僞多く我軍に來り行長に說きて和を講じ冊封の事を議す行長不學にして封冊の故事を知らず故に惟敬の端着する所となり秀吉當に明國に王たるべしと聞へり因て秀吉に陳じ和を許さしむ秀吉乃ちこれを聽し朝鮮の二王子を還し小西行長等をして留りて釜山を守らしめ諸將を召還す時に文祿三年正月なり是より先き秀吉の側室淺井氏秀頼を生む關白秀次早晩己れの廢せられんことを知り酒を縱にして亂行多し秀吉奏請してその官爵を削りこれを殺す

慶長元年明使楊方亨沈惟敬等來る秀吉これを伏見城に延見し僧承兌をして冊書を讀ましむ爾を封ぜして日本國王と爲す』と曰ふに至り大に怒りて使者を逐ふ是に於て翌年二月秀兵十四万を發しまた朝鮮を征ず小早川秀秋を大將とす諸將概ね前役の派遣する所なり二月諸將次で朝鮮に渡る李昭警を聞きて海州に走る明主刑玠楊鎬等をして朝鮮を援けしむ明及び朝鮮の兵水陸の銳を盡して全羅を守る我水軍の將連りに敵船を敗り水陸相

豐臣秀吉

應じて進み途に全羅を平げ將に國都を衝かんとす時に天塞し清正退きて蔚山を守り行長順天を守り諸將營を連ねて釜山と聲援を爲す時に敵兵大擧して蔚山を圍み別に兵を備へて我軍の援路を絶つ清正淺野幸長と固く守る既して糧食飲水盡き飢渴交も至る城兵馬を刺しその血を飲みその肉を食ふ時に天大に雪ふり士卒指を墜す者あり然れども清正自若として動かず益す守具を修めて相戰ひ日に敵兵數千を斃す諸將急を聞き赴き援ふ清正幸長城を出でゝ夾擊し大に敵兵を破これを追ふ伏屍數十里に連なる慶長三年四月秀吉秀秋行長清正及び義弘等をして留て釜山蔚山順天泗川の四城を守らしめその餘の將師を召還へす時に明將董一元大擧して泗川を攻む義弘聚ちてこれを破る此歲秀吉病篤し遺命して朝鮮の軍を收めしめ又諸將に托して秀頼を輔翼せしむ秀吉將に瞑せんとす已にして目を張りて曰く『我が十万の兵をして海外の鬼とあらしむる勿れ』と言畢りて薨ず年六十三是に於て外征の諸將悉く引き還る時に慶長三年なり朝廷秀吉に豐國大明神の号を賜らる

德川光圀

德川光圀は水戸中納言頼房の二子なり（頼房は德川家康の第九男なり）幼名を長丸と呼び三歲の時書を能くし又事理に通じたり七歲の頃一日雪大に降りしかば長丸即席に一句を詠じて曰く「ふる雪がおしろいあらば手にためて小がうがの顏にぬりたくぞある」小がうとは長丸の保母にして面頗る黑かりしを以て戲るなり寛永十一年父頼房罪人を斬りてその首を櫻の馬場に梟す頼房夜る長丸を呼び罪人の首を提げ來らしむ櫻の馬場は小石川邸の西隅に在りて樹木翳鬱甚猶ほ暗し長丸命を受け毫も恐るゝ色なく直に櫻の馬場に至りその首を提げて來る頼房大に喜ぶ時に年僅かに七歲頼房曾て光圀に向ふて曰く『一朝事ありて予と汝と共に戰陣に臨み予敵の爲に傷けられて斃れば汝に予を介抱すべきや如何』光圀答へ然として曰く『否兒は父の屍を越へて敵と戰ひその讐を報ずべし』頼房嗟嘆す

德川光圀

正保二年初めて史記の伯夷傳を讀み兄頼重を越へて家を嗣ぎしを以て意安からず因て頼重の子綱條を養ひて家を嗣がしひ天下皆これを嘆賞す明の朱舜水亡げて長崎に抵る光圀これを聘し待つに賓師の禮を以てす舜水毎に曰く光圀は仁武聰明諫に從ひ弗らず古今その比ひなし且つ國を讓る德と爲す然れどもこれを爲して迹あり世人曰く『古人は今人より高し中國の一事泯然としてその迹なし眞に大手段といふ可し泰伯夷齊を稱して至は外國に勝ると是れ井蛙の見のみ』と

光圀節儉を尚ひ甚しく無用の費を省けり片紙と雖も濫りに捨てず丁寧に是を撰び分ちてその所用を定め書東の裏料紙の切れ長短とおくこれを補綴して詩歌の草稿とおし若し誤つて水を翻す時は布を以て拭ひ紙を以て拭ひしことおし又侍女等が紙を濫費するを見て製紙場に赴かしめ漉紙の艱難を覽せしめて之れを戒めたり

光圀忠孝の志厚く壯年より老後に至るまで毎年正月元日早朝に衣冠を著け京師の方に向て遥拜したり常に曰く『天子は我が主君なり將軍家は我が宗家なり棄るべからず』とまた大日本史を編みて大義名分を明かにし勤王の意を表はせり曾て楠正成の碑を湊川に立て自ら題して嗚呼忠臣楠氏之墓といふその心を王室に存するの深きを見るべし

光圀最も心を藩政に留め自から稼穡して民の艱苦を嘗め租稅を薄くし究乏を恤み孝節を表す常陸玉造村の農民に彌作といふ者あり家貧くして田産なし人に依て耕作す母に事へて至孝なり光圀これを聞きその家に至り兩手に金を掬し彌作の頭上に捧げその孝を褒賞し之れに與へて曰く『是れ余が與ふるにあらず天の賜ふ所なり』と又勸業に心を尽し貪欲草木の類を外國より致してその繁殖を計り牧場を開きて馬を畜ひ海參昆布白魚榮螺蛤を那珂の港に放ち植えしかば後竟に國産の一となれり

光圀の著書甚だ多しその重なるものは大日本史禮義類典扶桑拾葉集南朝事蹟田村丸事蹟考保元平治參考盛衰記參考太平記參考新撰年中行事成憲

新井白石

摘要、神道集成歷代大臣考、常陸國志、水城實錄、金澤藝餘殘編、和蘭譯語、釋奠儀墓祭註解等あり延寶三年正月後西院帝より雪朝遠望といふ勅題を賜へりしかゞ光圀律詩三首を作りて之れを上る

後光圀小庵を西山に結んで退隱し元祿十三年卒す年七十三義公と謚す光圀の死するや門前に落書をあすものあり五聖人七賢人十惡人を撰び光圀を推して五聖人の第一と爲したりその當世に譽あること此の如し

新井白石

新井白石名は君美字は在中白石は其號なり其先世は新田二郎より出づ父は土屋侯の家臣なり白石幼にして奇才あり侯殊にこれを寵異す年十三の頃侯の贈答の書簡は皆白石をしてこれを草せしめたり後故ありて流浪す曾て慨然として曰く『大丈夫生れて封侯を得ずんば死して當に閻羅王となるべし』と既にして節を折て書を讀む江戸の富人河村瑞賢妻はすなる孫女を

以てせんと欲し且つ三千金の地を與へて學資に充んと請ふ白石曰く『潭上の小蛇大龍を傷け竟に死に至らしむ我れ大龍豈に小蛇の爲に疵を受けんや因て之を辭す而して家益す貧し而して攻學怠らず貧に居て晏如たりその學問該博名聲稍く顯はるその師木下順菴これを加賀侯に薦んとす加人岡島仲通白石に語るに國に老母あるを以てし自から代らんことを請ふ白石諾しこれを順菴に告ぐ順菴その信あるを嘆美し竟に白石の言の如くすといふ

元祿六年將軍家宣甲府邸に在り白石徵されてその儒官となる時に年三十七待遇日に厚く進講畢る每に坐を賜ふて國家の遺事を說かしむ十四年命を奉じて藩翰譜を撰す七月稿を起して十月終る既にして家宣入て儲君となり竟に將軍職を襲ぐに至り白石を召し文學を以て殿中に仕へしめ事大小となく必らず召して問ふ

正德元年朝鮮の使趙大億來聘す白石因て從五位下に叙し筑後守に任ぜら

新井白石

れ接伴職を命ぜらる故事朝鮮の使節を饗するゑ猿樂を以てす是ゑ至りて
れを廢し始めて雅樂を用ゐ使節接見の禮終りて復書を得るゑ及びて推し
て曰く『書中我が七祖の諱を犯すあり願くばこれを改めよと白石答て曰く
『臣子君父の爲めゑ諱むの禮あり然れども隣國の君をして國諱を避けしむ
るの理あし且つ五世以前を諱まざるは禮あり何ぞ況んや七世の祖をや抑
も臣子の情果して忍びざる所ある乎然らば貴國の書已に我國祖考の諱を
犯せるは何ぞや先づこれを改め書して後これを請ふて可あり』と韓使屈服
す

白石固と經濟のオゑ長す勘定奉行荻原重秀府庫缺乏せるを以て惡幣を鑄
造しその廉利を得て財用を足さんと請ふ白石これを駁して曰く『前將軍(吉綱)
惡幣を鑄てより物價暴騰し下民大ゑ苦む今亦更ゑこれを惡くすその害測
るべからずと議竟ゑ止む時ゑ永寶七年あり
翌年重秀又建策して曰く『今日通用する所の金貨の雜分を去りその大さを

縮小せん民明かゑその純金たるを知らば必らず喜んで通用すべし白石曰
く苟くもこれを改めて斷じてその古制ゑ復するゑ如かじ然れどもこれを
改むるの間奸を恣ゑして私ゑその品位を竊むものあらん』と請ふて造幣監
察の吏を置く後果して金銀の純分法の如くあらざるものあり白石重秀の
姦を怒り抗疏してこれを斥けんと請ふ重秀竟ゑ職を奪ゐる當時重秀財政
ゑ工あるを以て任用せられ聞老と雖もその奸を知るものあし而して白石
獨り之れを察し災を未崩に防止することを得たり正德四年金銀貨を改め
て慶長の古制ゑ復す是ゑ於て物價大ゑ平準を得たり是れ白石の議を用ふ
るあり

白石又我が朝久しく冠服を廢し上下竟おきを慽みとし將ゑ禮典を制し俗
風を改めんと欲しその議を上る家宣嘉納す正德二年家宣薨ぜしを以て果
さず白石が韓使ゑ對し禮法を正し大ゑ我が國威を揚げ又惡貨を廢して古
制ゑ復し禮典を制して上下の別を章かゑせんとするが如き名い德川の儒

新井白石

山縣大貳

臣と雖も治世の勤王家と稱して不可あかるべし

白石經史を精究し和漢の典故通曉せざるあし著書百六十余種ありその論史餘論は古來政府興廢の理を述べ折燒柴の記の貨幣論は貨幣の原理を說き又羅馬の宣教師及び和蘭の貢使は就き万邦の事情を聞きて采覽異言西洋紀聞を著わす本却洋學の起る實は白石は基すといふ

將軍家繼年四歲にして職を襲ぐは及び間部詮房事を用ひ政令頗る紊る時は白石老て當世に意あし乃ち門を杜ぎ客を謝し日夜典籍を以て樂みとす正德十年卒す年六十九德川氏隆治の間儒者の出るもの數ふるに遑まあらず而してその經濟實用の才あり卓異超凡の見あるもの白石に及ぶものあ

山縣大貳

山縣大貳わ兵學者あり名わ昌貞柳莊と号す大貳わその通稱あり幼字を三

之助といひ享保十年を以て甲斐に生る山縣三郎兵衛昌景十一世の孫あり父を領藏と稱す大貳天資穎敏にして豪邁山梨郡山王樓現の祠祝加々美櫛塢に從ひて學ぶ櫻塢業を三宅尚齋に受く是を以て大貳大義に明かあり皇學儒學佛陰陽方伎より諸子百家に至るまで涉獵せざるあし尤も兵學に達す常に慨然として皇室を復興するの意あり柳子新論十三篇を著わし正名篇を以て首とあし以て大義名分の紊亂を諷す其の餘得一、人文、大体、文武、天寶曆六年江戸に來り四谷坂町に居る十二年八町堀長島町に徙る常に紫綬を以て髻を結ぶ藩吏咎めてこれを撤せしむ門に入る者常に數百人諸侯或わ餼を厚ふして之れを徵し或わ月糧を給す小餼侯織田信國賓師を以てこれを待つその老臣吉田玄蕃津田駒母及び京師の人藤井右門竹内式部の徒常に相往來して文を論じ武を講ず遂に古今の兵法攻城野戰の得失利害を亟り常にこれを証するに江戸城を攻め南風に乘じて品川に火箭を放つべ

山縣大貳

し等の語を以てす終よ更議よ羅り大憲を犯すを以て論じ死刑に處せらる
連坐するもの甚だ多し實よ明和四年八月廿二日あり年四十三
大貳の黨竹内式部ハ山崎敬義の門人よして所謂神儒學派たり常よ淺見安
正の著せる靖献遺言を說き勤王の義を明かよす公卿その門よ遊ぶもの多
く就中櫨大納言源敏通最もこれを崇信す時よ流言あり式部軍學を演說し
公卿多くこれよ從ひて武を講ずと因りて寶暦七年冬二條府式部を召して
鞫問す式部その之れおきを辯辯して事終よ止む明年十月二條府再び式部
を召しその武を講じて或ハ公卿を勸め鎧甲を蓄ふることを拷問す而して
式部前言を以て答ふと雖も終よ免れず獄舍よ繫がる諸公卿亦多く坐して
幽せらる九年九月二條府式部の罪狀を決して曰く『吉田白河の兩家世々神
道の宗たり然るよ式部叨りよ神學を唱へ兩家を引きて門人と爲し且つ諸
公卿をして文學よ皈せしむると爲しこれを妓院よ誘致し道義よ違ひ風俗
を破る其罪たる重し』と乃ちその家を藉して官よ沒收し京師を放逐す或ハ

曰ふ式部密勅を受くと蓋し俊基資朝の徒おらひ
大貳著ハす所の書數種ありと雖も散じて傳ハらず今存するもの柳子新論
の外に醫事撥亂素難評孫子講義の三種あるのみ大貳既よ刑を破りて家絶
つ孫昌嶽よ至り官よ請ひて家を立つことを得たり明治十三年今上山梨縣
を巡幸あらせらるゝや大貳が尊王の志を憐らして非命よ死するを恤み玉
ひ祭祀金を賜ふ有志者亦義捐し十六年よ至り大祭を施行すその後官忠節
を嘉みし贈位の特典ありしといふ

本居宣長

本居宣長ハ伊勢飯高郡松坂の人姓ハ平氏その先ハ櫨大納言頼盛の裔本居
縣判官武秀四世の孫あり父定利子あきを以て大和國水分神社よ祈り宣長
を生む幼時富之助といふ後ち通稱を彌四郎又健藏といふ春庵といひ中衛
と改む名ハ初め榮貞と云ひ後ち今の名よ更む宣長少よして群童よ秀拔し

本居宣長

本居宣長

常に遊戯を爲さず好んで書を讀みたり

寶歷二年三月宣長京師に往き儒術を堀景山に學び醫術を武川幸順に學び たり而して契冲の著書を讀み加茂眞淵の冠辭考を得たるに同六年七月おりき骨て同友を會し謂ひて曰く『吾れ學を以て天下に冠たらずんば則ち足下と會せず』と冠辭考を得てより沈思反覆よく此の書の本源を了しその精心氣力果して皇學を中興し一世の泰斗と稱せらるゝに至れり

宣長加茂眞淵を飲ひ途にその弟子となりしが只だ一たび之れに而したるに過ぎず後に名簿を送りて道を問ひしのみ眞淵亦深く望を宣長に囑す宣長學益す進むに隨ひその醫業亦大に行われ治療を請ふもの甚だ多し宣長その治療に出る時と雖も駕中卷を手に卷を釋てず名聲天下に震ふ門に入て教を乞ふもの殆と五百人某侯宣長の皇學に絶世なるを欽し祿三百石を以て招く紀州侯亦これを徵す宣長乃ちこれに從ふ蓋しその產地勢州松坂に侯の領おりしを以て祿の厚薄を顧みるに遑あらざりしなり紀侯龍遇最も厚く宣長召されて大祓祠、古今集序、又歌道の事を進講せり侯遂に登用して奥醫師の列に加へ俸祿を賜へる

享和元年宣長京師に上り四條烏丸の東に寓し中山大納言三條大納言園大納言花山院右大將日野一位大炊御門中納言綾小路中納言富芝山中納言富小路三位等の諸卿或いこれを殿內に召し或いこれを旅寓に訪て國史國文の講說を聽聞す又攝政の命に依り著書取戎慨言を呈せしかば其の書乙夜の覽に入りしといふ享保元年九月廿九日宣長歿す年七十二

是より先き寛政十二年自ら墓所を伊勢國飯高郡山室山の山上に定め標石を立て一本の櫻樹をその傍に植えその時の歌に曰く「山ひろに千年の春の宿しめて風にしられぬ花をこそ見め」是に至り山室に葬る

宣長著述甚だ多し今一々枚擧せずその最も不朽に垂るゝものゝ古事記傳四十四卷おり古事記い皇國の古傳古語を存して絶て漢意を交へず故に貴きや論おきおき然れども難語多くして讀み易からず故に先輩の學者これ

本居宣長

本居宣長

を解くことを肯てせず宣長これを嘆じ大に精力を尽して遂に傳數十卷を著わし天下に示すその考証の精確なる千古の疑ひを一洗するに足れりその稿を起せしは明和元年にして年三十五歳の時なり而してその稿を終りたるは寛政十年なり即ち明和三年を距ること實に三十五年一生の精力注ぎて此の書に在り

宣長嘗て道の論直日靈といへる書を著わす江戸の人市川某未我廼比禮を著わして是を難ず宣長一見し微笑して曰く斯る兒戯に類するの書幾許出るも齒牙に掛るに足らずと措て顧みず門人強て反駁を請ふ宣長已むを得ずして二三夜間に葛花二卷を著わして之れを排す

又藤貞幹微口發といふ書を著わして宣長の學を辯駁せんとす宣長その說の大義に關わるを憤りて忽ち鉗狂人を著わしてこれを辯ず實に當時皇學に於て天下その右に出るものなしその直日靈玉櫛笥等の書は我が皇道の基源を發明しその他歌戎慨言の如き詞玉緒の如き紐鏡の如き皆我國學に

裨補あるの書にして後世文學の模範とするもの尠からず

宣長國學を中興し國風國魂を主持し忠君愛國の氣象を皷舞す曾て詠じて曰く「敷島のやまとこゝろを人とはゞ朝日にほふ山ざくら花」と後人これが爲めに感興起する所ありその王政中興を唱ふる者宣長の力與れり

中世勤王家列傳終

明治三十二年二月廿日印刷
明治三十二年二月廿八日發行

編輯兼發行者　東京市日本橋區通二丁目十三番地　中島石松

印刷者　仝　日本橋區新和泉町一番地　瀧川民治郎

發兌　仝　日本橋區通二丁目十三番地　松聲堂

印刷所　仝　日本橋區新和泉町一番地　今古堂活版所

特13
908

勤王家列伝

国立国会図書館

004744−000−3

特13−908

中世勤王家列伝

谷口　政徳／編

M32

ACE−1432